
緋弾のアリア～夜の怪物にして闇の狩人～

Mirage wolf

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜夜の怪物にして闇の狩人〜

【Nコード】

N2813S

【作者名】

M i r a g e w o l f

【あらすじ】

光を愛しながらも、闇に生きる青年。彼は祈り続ける。神父としてではなく、一人の人間として。世界が平和になりますように……

序の傷 彼は何に祈るのか

イギリスの某所にある教会――

「Requiem? ternam dona eis, Domine, et lux perpetua luceat eis
(主よ、永遠の安息を彼らに与え、絶えざる光でお照らしてください。)
」

高く、澄み渡った美しい歌声が響いている

ステンドグラスから眩しいまでの光が降り注ぎ、美しい歌声と見事に混じること此処は本当に神々の聖域のような光景を連想させた

「et tibi reddetur votum in Jerusalem, et tibi reddetur votum in Jerusalem(神よ、シオンではあなたに賛歌が捧げられ、エルサレムでは誓いが果たされます。)
」

美しい歌声で鎮魂歌^{レクイエム}を紡ぐのは、身長180cmほどの黒髪の端正な顔立ちをした青年

神父の正装を着ているところから、おそらくこの青年が教会の神父なのだとわかる

「Exaudi orationem meam, ad te o

mnis caro veniet（私の祈りをお聞き届けください、すべての肉体はあなたの元に返ることでしょう。）」

青年の後ろ——参拝者が祈りを捧げるために座る長椅子には何人かが座っている

彼らは、神に祈りを捧げにきた巡礼者——ではなかった
彼らの座る長椅子の下……大理石でできた床には赤い液体の水たまりができていた——血だ

ある者は胸に大きな穴を空け、ある者は腹部から腸やらの内臓を露出させ、そして、ある者は首から上がなかった

——皆、死んでいるのだ

「Requiem ? ternam dona eis , Domine , et lux perpetua luceat eis
（主よ、永遠の安息を彼らに与え、絶えざる光でお照らしてください。）」

鎮魂歌レクイエムが終了すると、青年は目を瞑り両手を合わせる。彼は神に祈ったのか、それとも別のものに祈ったのか？知る術はない
祈り終わると、青年は後ろへ向き、死者たちに向き合う

後ろを向いた青年の姿は変化していた。闇のように黒かった黒髪は、少し黒みがかった銀髪になり、指の爪も少々伸びて鋭利になっていた

——狼男

この青年をどのように形容するのが一番だった。顔は狼のようにはなっておらず、先ほどと何も変化はないが、黒みがかった銀髪と鋭利に伸びた爪が狼の毛皮と爪を思い起こさせるのだ

しかし、恐ろしい外見と相まって、端正な顔立ちからどこか気品すら感じる

「あら、今日はずいぶんと来たのね。これで何回目かしら？」

ガタンと教会の大きなドアが開き、声が聞こえてくる
入ってきたのは、茶髪の女性

長い髪を後ろで編み、まつ毛の長い瞳をした、まさに――

――『絶世の美女』だった

「二十九回目ですよ……あなたはよほど毎日暇なようですね。こんな教会に毎日訪れる人間なんていませんよ、カナ？」

「私も別に暇では無いのよ？でも、愛する人の元へは毎日行きたくなるのは、当たり前でしょう？アルト」

美女は『カナ』と呼ばれ、狼のような青年は『アルト』と呼ばれた
光差す教会で向かい合う美女と怪物

一見、美女が危険に見えるが、どこか絵になる光景だった

「愛する人ですか……あなたに一体何回その言葉を言われたかわかりませんが、未だに寒気がしますよ」

アルトは首をすくめて言った。目の前にいる人間の秘密を知っていなければ、こんなことを言う男はいないだろう
だが、アルトは目の前の人間の秘密を知っているのだ。だからこそこんなことを言う

「つれないのね。まあ、いいわ。お呼びがかかってるから、早く行きましょう」

「……了解しました」

アルトは歩き出すカナの後へ続き、教会の外へ出る
死体はそのままだが、どうせここに来る一般人などいない
外は完全なる森。一度入った者は、道のりを知らないと出口にすら戻ることが不可能なほど深き樹海だった

二人はそのまま木々の中へ歩き出し、すぐに見えなくなった

序の傷 彼は何に祈るのか（後書き）

カナをヒロインにしているのか迷います……更新不定期になるかも
しれませんがよろしくお願いします

設定の傷

アルトリウス・V・ヘルシング^{ヴァン}

通称：アート アーくん アルト

22歳 身長178cm 体重67kg 性別男
blood type O

イ・ウー所属の神父にして吸血鬼ハンターヴァン・ヘルシングの孫。金一のパートナーとして行動することが多い

狼男に噛まれた呪いがあるため、一定量の血を見ると人狼に変化する変化するといっても、外見で変化するのは髪の色と爪が伸びるだけであり、狼のような外見になることはない

人狼状態になると身体能力が桁違いに上がり、脚力で地面を割り、腕力でトントラックを余裕で破壊するほどになる。判断能力は鈍るが、動体視力や気配を察知したりする能力も格段に上がる

異名は「^{ファントム・キラー}静寂の切断魔」「^{ヴァナルガンド}凶獣」

武装

大型マチェット

黒き刀身で長さ1mほどの大型マチェット。切れ味は業物にも劣らない。二本使用する

アサシンブレード

両袖に仕込んだ、飛び出すナイフほどの幅の小刀

スプリングフィールド・オメガ

10mmオート弾を発射するロングバレルの大型自動拳銃。現在製造中止で使っているのはアルトくらい。バレルにSleep in the darkと彫られている

ストレイヤーヴォイド
SVインフィニティ・ハイブリットモデル

45ACP弾を発射する自動拳銃。威力は高い

スタームルガー・ブラックホーク

コルトSAAのコピーだがマグナム弾装填のために各部が強化されたりボルバー。これを使用すれば「不可視の銃撃」インヴァジビレが可能になる

設定の傷（後書き）

こんな感じです。そろそろアニメも始まりますね。今から楽しみで
す

一の傷 闇夜の叫びは悪魔も恐れる

「『日本へ飛び、^{デュランダル}魔剣のサポートをしろ』……なんで、私が……」

今回アルトに告げられた指令内容。これに対して、アルトはため息を吐いていた。

正直、この男はサポート向きではない。理由は、この男と同等に戦闘できる人間は今のところ一人しか知らず、その者としが戦闘時に行動を共にしたことがないためである。

それに、この男はイ・ウーに所属していてもトップに従っているわけではない。むしろ逆だ。

今回も独自に行動するつもりである。

成田空港に降り立ったアルトは目に付いたのカフェに入り、ブラックコーヒーを頼む。

少し経ち、コーヒーが来るとアルトは、コーヒーを持ってきた女性店員に丁寧な礼をする。

それを見た女性店員は顔を赤くし、一礼をして去って行った。

去っていく店員を見届けると、手に持っていた皮のバッグを開きノートパソコンを取り出す。

ディスプレイを開き、カタカタカタカタカタと素早くキーボードに指を躍らせる。キーボードを叩く音が全て繋がっているように聞こえるほど、素早いタイプだった。

「東京武偵高校。レインボーブリッジ南方に浮かぶ南北およそ2キロ・東西500メートルの人工浮島に設立された武偵を育成する総合教育機関であり、校則により校内での拳銃・刀剣の携帯が義務付けられている。こんなところですか」

パソコンの画面に映ったのは東京武偵高校の全体写真と、命令内容の詳細が記された文章だった。

命令書の端には小さなピンクのツインテールをした少女の画像が付属されている。

「神埼・H・アリア。彼女は殺すな。か……」

そう呟いて、写真の少女を見る。

命令書の中にはこの少女は絶対に殺すなど記載されている。この少女はイ・ウーが起こした事件の冤罪を被せられ服役中の母親がいるということを知っている。さぞかし、憎いのだろうな。

アルトは画像を睨みつけて思った。

この少女にどんな秘密があるのか？彼女は奴が重要視するほど、『教授』の目的に必要な存在なのか？

いずれにせよ彼女に目をつけておくのが一番だろう。

次に、個人的にハッキングして入手した写真の少年を見る。

「遠山キンジ。東京武偵高校2年A組所属。専門科目は探偵科でランクはE。1年の2学期までは強襲科に所属しており、入学時のランクはS。しかし、それは『ヒステリア・サヴァン・シンドロームHSS』を発症した状態で試験を受けたためである」

写真に写る、黒髪のいかにも日本人な少年を見て思った。

この少年は謎だ。

現在の實力としては私や相棒に全く敵わないだろう。しかし、そんな雑魚をH家ホームズの人間がパートナーにするのか？いくら『HSS』ヒステリア・サヴァン・シンドロームを持つ人間であつても、本人の實力が無くては超偵や、かなりの実戦経験を積んだ兵士には敵わない。

神埼・H・アリアは本気でイ・ウーと喧嘩をするつもりはあるのか？

アルトはそのことを疑問に思いながらパソコンを閉じ、会計を済ませカフエを出て空港の出口へ向かった。

（バカッ！バカバカバカバカバカバカバカッ！キンジのバカッ！）

神崎・H・アリアは走っていた。通り過ぎさまにどれだけの人が彼女を奇異の目で見ても、気にせずにとだ、行く当てもなくひたすら走っていた

（どうして、みんな、あたしのことを分かってくれないのよ。先走りの、独り決めの、弾丸娘——ホームズ家の欠陥品って呼ぶ。キンジもそう！）

アリアは心の中で悲痛の叫びを上げていた。

長年、身内からも快く思われていなかったのに、やっと見つけたパートナーからも同じように思われた。

——裏切られた

彼女の目には涙が浮かんでいた。どうでもいい人間からは何を言われようと思われようと、気にしなかった。しかし、苦労して信頼できる相棒を見つけたのに、その相棒に信じてもらえなかったことは、彼女の心に深い傷をつけた。

ドンッ

どのくらい走ったかは分からなかったが、前も向かずに走っていたため、誰かに衝突した。

アリアは小柄で相手は男で大柄だったので、アリア一人だけが後ろに倒れた。

アリアはぶつかった相手に非難の視線を浴びせ言った。

撫でられたアリアは、さらに顔が真っ赤になり、撫でられる気持ち良さと恥ずかしさで、もうわけがわからなくなっていた

「え、え」と……どうしようか……」

青年はその様子に困った表情を浮かべるだけであつた。

「落ち着きましたか？」

「うつうつ、変なトコ見られた」

青年とアリアは近くの公園のベンチに座っていた。
アリアはさっき、恥ずかしいところを見られたと思い、少し沈んでいた。

「あはははは、いえ、私も久しぶりに可愛いものを見れましたので
嘆くことはありませんよ」

「カ、カワイイ……」

アリアは折角、落ち着いたのに再度顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。
それを見た青年は近くの自販機へ行き、紅茶の缶をふたつ持ってきた。

「これ、どうぞ。缶の紅茶なのは申し訳ありませんが、よかったら」

青年はアリアへひとつの缶を差し出す。

アリアは少し申し訳なさそうな表情をしてから、それを受け取った。

「んくっ、んくっ、んくっ、ぷはぁ。ありがとう。紅茶、買っても
らっちゃって」

「いえいえ。このくらいの出費はなんでもありませんよ。それより

」

青年の顔が急に真面目になる。

アリアは一体何事だ？と思い、身を引き締めた。

「さっきまで、何故、あんな風に走っていたのですか？何かから逃げている。というわけでもなさそうでしたし……いや、人間ではない。別のものから逃げてきたですね？」

アリアは、ハッとした。まさに、その通りだったからだ。

あそこでアリアが逃げたのはキンジではない、キンジが思う自分への気持ちから逃げたのだ。

こんなことを見ただけで、分かってしまうなんて、この人は何者だろう？……神父か。

「……図星、ですか？」

「うん……」

「よかったら、聞かせてくれませんか？何故、貴女が逃げたのか？少しは力になれるかもしれません」

青年神父は優しく言った。

しかし、アリアは初対面で、しかも迷惑をかけてしまった相手にそんなことを相談するのは、さすがに悪いだろう。と思って、断ろうとした。しかし――

「悪いなんて思わなくて結構ですよ。迷う者を導いたり、悲しむ者を慰めるのは神に仕える者の役割です。だから、気にしないでください。むしろ、私のためだと思って話してはくれませんか？」

この青年神父。実は結構な人の悩みを聞いてきたのではないだろうか？

アリアは、人の表情を見るだけで心の中まで読めてしまう青年神父に感心していた。

ここまで言われては話さないほうが、相手に悪いだろう。

「実は――」

アリアはさっきまであったことを全て話した。もちろん、家の名前やキンジの名前は伏せてだが、青年神父はそれを、彼女の目から一秒もそらさずに真剣に聞いていた。

「そうですか……」

「神父さまも、同じことを思いますか？あたしが、名家の……欠陥品だって」

話を聞き終えた青年神父と話し終えたアリアは、隣り合ってベンチに座り、沈んでいく夕陽を眺めていた。とても綺麗な夕陽だが、夜が始まる前兆でもある。

「私は貴女と今日会ったばかりで、なんとも言えません。……ですが」

「ですが……？」

「貴女はパートナーを信頼しているのでしょうか？」

「……うん」

アリアが短く言うと、青年は少し笑って

「なら、近いうちに彼もきつと貴女の信頼に応えてくれるはずです。人が分かり合うということは時間を要するものですから」

そう言った。

そして、青年はベンチを立ち上がり、アリアの方へ向いた。

「すみません。私もそろそろ用がありますので行かなければなりません。家までの付き添いは要りますか？」

辺りは、少々暗くなっていた。しかし、武偵であり並の男より遙かに強いアリアには付き添いはいらなだろう。

「いえ、平気だわ。わざわざ話、聞いてもらっちゃって、ごめんなさい」

「ふふっ、そうですか。ならばお気をつけて—————
ういえば」

歩いていた青年神父は急に立ち止まり、再度アリアの方へ向き言った。

「早く仕事に戻った方がよろしいですよ？」

「えっ！ちょっと、それどうゆ……………いない」

目の前にいた青年神父はいつの間にか消え失せていた。まるで闇と同化してしまったように、青年神父がいた場所には何もなかった。

「な、なんなのよ……………」

アリアは目の前で起きた現象に信じられないと思いつつも、学校へ戻るため来た道を走った。

夜、一人の青年神父が夜の路地裏を歩いていた。

青年神父の名前は、アルト。アルトリウス・V・ヘルシング。名前の通り、吸血鬼殺しの子孫であり、彼も吸血鬼殺しである。

夜は彼が一番嫌う時間帯だ。闇は邪なる生物の力を強め、己の内に潜む『彼』を凶暴化させる。今でも心の奥底には残虐な意思が渦巻いている。

この意思に身を任せてしまつたら、確実に辺りは血の海と化すだろう。だから、彼は自らの強靱な意志で、もう一つの意味を抑え込んでいる。

「もうすぐだ……もうすぐ奴を殺せる……だから、今は静かにしろ」

彼が誰かに語りかけるも、周りには誰もいない。そして、返事も返ってこない。

当たり前だろう。彼は自分に話しかけているのだから、彼にしか『彼の声は聞こえない。』

「グルルルルルッ！」

不意に獣の声が聞こえた。

目の前を見てみると、100キロに迫ろうかというほどの巨体をした——狼がいた。

その眼からはアルトに向けて、かなりの殺気を放っている。普通の人なら、たとえ武偵でも逃げだすほどの殺気。だが、目の前の神父は全く動じなかった。

「奴の刺客か……チツ、狼使うなんざ俺への嫌がらせか？——消えろ」

ぶわっと、一陣の風が狼と神父のいる路地裏を通り抜けた。おそろしい……いや、おそろしいなんて単純な言葉では表せないほど強大な殺気が、神父から放たれている。

巨大な狼は急に体を縮こませ、体を震わせて怯えていた。風もさつき一陣吹いただけで、それ以降、風なんて全く吹いてこなかった。まるで、風すらもこの神父に怯えるように。

「どうした？人の言葉がわからないのか？そんなわけはないだろう。もう一度言う——消えろ。俺の前から去れ。同族を殺すつもりはない」

狼は犬のように「キャンッ！」と一鳴きすると、全速力で路地裏から去って行った。

「そうだ、それでいい。狩る側のものが狩られる気分をよく味わっただろうしなあ」

神父は路地裏の闇で姿こそ見えなかったが、先ほどまでの青年ではないことは闇から聞こえる声で容易に想像できた。

まるで、何人もの人間を愉しんで殺してきたような。そんな残酷な声だった。

「クハハハハハッ！待ってるよお。俺の同族かぞくを使うんざ、いい度胸じゃねえか。そうだよなあ？ブラド・ツエペシユウウウウウウウウッ！！お前には、死が羨ましいほど惨たらしい『死』を用意してやるよ。ヒヤハハハハハハハハッ！！」

夜の路地裏にはまるで狂人のような笑い声と叫び声がいつまでも響き渡っていた。

一の傷 闇夜の叫びは悪魔も恐れる（後書き）

主人公の裏人格がカオス過ぎる……感想、評価など頂けたら幸いです。

二の傷 見えざる殺しの刃

東京武偵高校から100mほど前。

アルトはそこにいた。もちろん命令を実行するためである。表向きは、だが

彼は、何かに気付いたらしく、アルトは不意に一つの高校校舎の七階あたりを見た。

そして、何故か携帯電話を取り出し、電話をある人物にかけた。

『……もしもし』

数回コールの後、相手は電話に出た。

感情を押し殺しているような、冷淡とも落ち着いているとも言える、少女の声だった。

「随分物騒な物で、私を狙っているようですね。レキ」

電話の相手はアルトが自分の名前を呼んだことに、珍しく驚愕していた。だが、それを表には出さず、あくまで冷静を装って、聞き返した。

『あなたは何者ですか？なぜ私の名前を知っているのですか。そして、何故狙っているとわかったのですか』

——何故狙っているとわかった？

その疑問は普通だった。なぜなら、レキがいる狙撃科^{スナイプ}の校舎から200m以上離れているのに、自分の方を見たのだ。

その男には自分の姿が完全に見えていたのだ。

「何者とは酷いですよ……まあ、仕方ありませんか。最後に会ったのは随分前ですし。こう言えばわかりますか？『私は光を愛し、闇を嫌う。しかし、光を手にすることは許されない』……と」

『その言葉……まさか、アルトリウスさん……』

「」名答。お久しぶりです」

『……何故あなたがここにいますか？あなたは「死んだはずですか？」……』

そう、アルトはレキの前で一度死んだはずだった。剣で確実に心臓を貫かれ、体は矢がいくつも刺さり、針の筵のようになっていた。呼吸も止まっていたし、瞳孔も開いていた。

しかし、遺体は火葬されるはずだったが、何故かその日には消えていた。死体の搜索が開始され、しばらく経つと死体は見つかり火葬された……はずだ

『蘇った……なんてことはありませんよね？』

黄泉帰り。

そんなことありえない。あつてはならない。この世界はいくつもの歴史を作り出し、その中にも『賢者の石』や、『命の泉』などを求めた人間は数え切れないほどいたが、皆不老不死や、黄泉帰りといった奇跡を起こすことはできなかった。

なぜなら、人は本来より人生を全うし、土に還るという運命さだめなのだ。その運命に逆らうことなど、できはしない。

「私は蘇ってはいませんよ。それは神にしか起こせない奇跡です」

『だったら……どうして生きているのですか』

「簡単なことです。私は死んでいなかった。それだけです」

——ゾクリッ

レキは「死んでいなかった」という言葉を聞いた途端に、背筋が凍りついた。得体のしれない恐怖をこんな遠くからでも恐ろしいほど感じた。

この人は何者なんだ？あの優しそうに見える笑顔の奥底に何を隠しているのか？

レキは恐怖のあまりに、ライフルのスコープから一瞬、目を離してしまった。

ほんの一瞬だった。しかし、その一瞬で電話は切れた。しまった！

と思い、スコープを再度覗いたが……

そこに映るのはただ、ただ灰色のコンクリート製の床だけで、先ほどの神父の姿は辺りを見渡してもどこにもいなかった。

「これが一流の超偵の戦い……なのね……！」

白雪とジャンヌがお互いに周りの物を切断しながら、互角に打ち合

っているのを見てアリアが言った。

切断されていないのは二人の刀剣。イロカネアヤメと聖剣デュランダルだけは何度切り結んでも傷一つつかずにいた。

お互いに一步も引かない刀と剣の切り合い。その二人に入る余地もなく、キンジとアリアはその様子をただ、見ていることしかできなかった。

「アリア、動けそうか？」

キンジは身を屈めて、囁いた。

つい数分前にあったことから、ヒステリアモードになったままだ。

「もう……大丈夫そう。でも、銃が床に凍り付いてるし、剥がしても使えない。あたしの銃は寒冷地仕様じゃないの。完全分解して整備しないと、生き返らないわ」

アリアは悔しそうに、氷漬けになったガバメントを見下ろした。

この氷はジャンヌの超能力によって生成されたものであり、普通に溶けることはない『魔女の氷』だった。

「作戦を立てよう」

キンジが言うと、いつも独断専行のアリアが顔を上げ――
――素直に、うなずいた。

「……寒いですねえ。こんなに氷張り巡らしちゃって……」

アルトは地下倉庫^{ジャンクシヨン}の中を歩いていた。
寒い。当然だ。

工場のように周囲に存在するパイプには、所々に氷が張っていた。
一部は完全に凍りついているものもある。
この氷は『魔女の氷』。浄化できるのは修道女^{シスター}か巫女だけである。
まるで、毒のようなものだ。

「神父は浄化できないんですかね?」――あつ、できませんね」

アルトが凍りついたパイプに触れると、一瞬で指を凍りつかせようと浸食してきた。

普通なら大慌てするところだが、そんなこと大したことないような顔をして、凍りついた指の第一関節を――噛み千切った。

「……あまり、人肉というのは美味しくはないですね……昔は宗教かなんかで食べられていた時期もあったそうですが……不味い。しかし、神様から貰った肉体を無駄にするわけにはいきませんしね……」

……」

アルトは心底嫌そうに、自分の指の一部を噛んでいく。

バキッ!、バキッ!グチャ、グチャと気持ちの悪い音もするが、味も気持ちが悪い。

噛み終わったのか、ゴクンと喉を鳴らし、自分の一部だったものを飲み込んだ。

「うええええ。吐きそうです……我ながらなんと美味しくない体……」

アルトは地面に向かって、おえっ、おえっとしながらも自分の武装を確認した。

マチェット二本に、愛銃二丁。それに、服に隠し持った、幾つかの暗器。十分だ。

確認を終えると、剣と剣の切り合う音の聞こえる方向へゆつくりと歩みを始めた。

右手を見ると、自分で噛み切ったはずの第一関節は、すっかり元に戻っていた。

「はあ、はあ……はあっ」

刀の柄を右手で握ったまま、白雪はその場に肘を突いた。

超偵は強い。強さは人知を超える。だが、RPGなどに存在するキャラクターと同じくMPのマジックポイントのようなものが存在する。魔導師のキャラクターはMPが切れると、ほとんど攻撃には役に立たない。それと同じだ。

今の白雪には、ほとんど体力は残っていなかった。

白雪は壁からざしゅ、と刀を抜くと、そばに落ちていた朱鞘を左手で探り当て、なぜか刀身をそれに収めた。

「甘い——お前はまるで、氷砂糖のように甘い女だ。私の肉体を狙わず、剣ばかり狙うとはな。聖剣デュランダルを斬ることなど

——絶対、不可能だというのに」

ジャンヌは、デュランダル魔剣の切っ先を、白雪の首に向ける。

「くっ……！」

鞘に収めた刀を体の後ろに隠すように構えた白雪が、齒を食いしはめる。

剣を構えたジャンヌの周囲に再び、ダイヤモンドダストが、舞い始める。

そしてそれが、見る間に吹雪のように室内に吹き荒れた。

室内が再び氷点下の寒さになる。

「見せてやる、『オルレシ안의氷花（Fleur de la
glace d'Orleans）』——銀氷となって、散
れ——！」

デュランダル
ジャンヌの魔剣が、見る間に青白い光を蓄えていく。
——その時——！

「キンジ、あたしの三秒後に続いて！」

叫んだアリアが、背中から寸詰まりの日本刀を二本抜きつつ、銃弾
のように飛び出した。

「何ッ!？」

白雪との戦いに集中していたジャンヌが、ハッ、と振り返る。

「ただの武偵如きが！」

怒りに身を任せるように剣を横薙ぎに払う。
アリアはさっきジャンヌが脱ぎ捨てていた巫女服を右手の刀で、払
い上げるように飛ばし、ジャンヌの視界をほんの一瞬塞いだ。

「――！」

ずざあああつ！と、アリアはスライディングの要領で身を低くする。だが、ジャンヌの腕は止まらなかった。

アリアがまるで合気道のような格闘技術で、相手の動きを先読みして動いていたからだ。

空中の巫女装束を押しつけ――アリアの上空を――

青い光の奔流が巻き上がる。

それはまるで、ゲームのような氷の魔法だった。

光の氷の結晶の渦が、蒼い方弾となつて天井にまで届いた。

天井はまるで、巨大な氷の花が咲いたように広く氷結していく。

「今よキンジ！ジャンヌはもう超能力ちからを使えない！」

キンジはアリアに言われるまでもなく、ダイヤモンドダストを？き分けるようにして、駆けた。

ガガガンッ！

キンジは三点バーストに切り替えたベレッタで、ジャンヌの正中線を銃撃する。

ジャンヌはその三発を、既に引き戻していたデュランダルで――

――弾こうとした。

ジャギッ！

一瞬、輝く光が見え、鋭利な刃物が抜き放たれるような音が響き渡る。

何が起ったのか、アリアやキンジはともかく、ジャンヌでさえもわからなかった。

キンジはその一瞬の光で目がくらんだ。

目が正常に戻ったときに見たのは――

「いやあ、ここまでくるのになかなか手間取ってしまいましたよ。全く寒かった、寒かった」

恐ろしいほど、端正な顔つきをした神父服の青年。足元には、計六個の割れた弾丸の屑が落ちていた。

この男が全て切り裂いたのか！？

キンジは青年の足元を見て目を見開いた。割れた弾丸の断面はかなり綺麗になっており、磨かれた鉄のような銀の光を出していた。

しかし、キンジがさらに驚いたのは目の前の男の手元だった。武器を何も持っていない……

あの一瞬で、刃物を隠したというのか？だとしたら人間業ではない。キンジがそんなことを思っているとは知らずに、青年神父は寒そうに手を擦り合わせて、はあく、はあく、と息を吐いていた。

「なぜ邪魔をしたのだ？あのくらいの銃弾など弾けたぞ。どういうことだアルト」

「いやあ。申し訳ありません。銃弾は弾けてもあちらさんは何か策をしていたようですしね。僭越ながら、介入させて頂きました」

アルトは言葉では謝っているが、さほど悪いとは思っていないように軽い様子だった。

すると、アルトが茫然としてるアリアの方へ向いた。

「こんばんわ。また、お会いできましたね。もうパートナーの問題は大丈夫そうで、なによりです」

相手は敵だというのに、アルトは満足そうに笑顔で言った。
アリアはその言葉にハッ、としたように口を開いた。

「あ、あああんた……あのときの神父さま……なんでこんなところに……」

アリアは目の前の様子が信じられないようだった。不思議ではないだろう。つい数日前、悩みを聞いてもらった相手が、敵として目の前にいるのだから。

「ふふっ、愚問ですね。貴女の目の前にいるということは、貴女方の敵であり、ジャンヌの仲間ですよ？つまり、イ・ウーです」

「なっ!？」

アリアは驚いた。この場にもう一人、イ・ウーの人間が介入してくるなんて、予想外にもほどがある。

だが、すぐに気を取り直し、日本刀を構えた。
それを見たアルトは急に大声で笑い出した。

「あはははははははははっ！久しぶりですよ。私の前に立ってそんな目ができる人間は。敬意を表して、命を取るのはやめておきましょう。物騒な物には消えてもらいますが――」

パンツ！ パンツ！ ズガンツ！

三連続の銃声――

だが、アルトを除く、この場にいる全員が捉えられたのはポケットに手をつ込んでいるアルトの手元で弾けた閃光のみだった。三発の弾丸はキンジとアリアが手に持っていた武器に当たり、それぞれ手元から弾け飛んだ。

キンジはこれを知っている。なぜなら、兄の技の一つであり、数多もの犯罪者を倒してきた技『不可視の銃弾』インヴィジブルだからだ。

「はい、これで危険物とはさようならですね。どうですか、久しぶりに丸腰になった気分は？」

アルトは笑顔を絶やさない。美しい笑顔だが、その笑顔は悪魔よりも恐ろしく感じられた。

しかし、殺気は全くと言っていいほど感じない。それが、逆に不気味なのだが。

「あんたは何者なんだ？ 殺気は感じないし、俺たちを殺す事ならいつでもできるのに、武器を奪っただけ。目的なんだ」

キンジは意を決して聞いた。本当はこの後殺すつもりではないか？
だったら、アリアと白雪に逃げる時間を与えなくてはいけない。そ
う、時間稼ぎだ。

「目的ですか？まあ、貴方が知る必要はありませんよ。しかし――

」

ジャギインッ！

再度、鋭い音が響く。これもまた、一瞬手元が光っただけで、どこ
からだしたのか、何を斬ったのか。何もかもわからなかった。

「随分手癖の悪い、巫女さんがいるようですね」

キンジとアリアは白雪の方へ向いた。

そこには転がっている刀と白雪。その間に、かなり鋭利な刃物で斬
りつけられたような跡が地面にできていた。きつと刀に手を伸ばそ
うとして阻まれたのだろう。白雪の腕を切断できたはずだが、それ
をしなかったのは「次は無い」という、警告だろう。

「そうか……あんたが『ファントム・キラー静寂の切断魔』なのね！さっきの斬撃を見
てわかったわ。そうなんですよ！」

アリアが叫んだ。相手にこちらを殺す意思がないということを踏まえ、上での叫びだろう。

相手を下手に刺激してはすぐに殺される可能性が高いが、目の前の神父はこのくらいでは全く動じないとアリアはわかっている。

「『ファントム・キラ―
静寂の切断魔』……ですか。あまり、いい名前ではありませんね。せめて『正義の柱』^{ボア・ド・ジュステイス}とでも呼んでほしいですね」

「首を刎ねる道具の名前の何がいいのよ。あんた見かけによらず悪趣味ね」

アリアが皮肉を言う。アルトはそれを微笑みで返す。

首を刎ねる道具。つまりはギロチンだ。制作を依頼した、外科医のアントワヌ・ルイの名前から『ルイゼット』や『ルイゾン』と当初は呼ばれていた。しかし、苦しまずに処刑できるようにと人間性や平等性を宣伝したギヨタンが有名だったので、『ギロチーヌ』と呼ばれるようになった。しかし、正式名称はそのどれでもない。アルトが先ほど言った『正義の柱』^{ボア・ド・ジュステイス}というのが、その処刑道具につけられた正式名称なのだ。

つまり、アルトは相手に『死』という感覚を味わわせずに、確実に殺せるということなのだ。

「さて、私にはあまり時間がありません。もう夜なのでね。今日のところは失礼しますよ。では――」

「えっ！？ちょっと！アル！なんで私を抱えてるのよ！はーなーせ
」

アルトはジャンヌを脇に抱えると、天井を一瞬で斬り裂き、そこから飛び出ていった。
それを見届けると、アリアは脱力したようにへなへなと地面に座り込んだ。

「おい、大丈夫か？」

「大丈夫なわけないでしょ！よりもよってあの『ファントム・キラ静寂の切断魔』
に会うなんて、私ホントに死ぬかと思ったわよ！武器はみんな全て
弾かれるし……ホントに怖かったんだからね！」

「そ、そうか……」

脱力したかと思ったらいきなり怒鳴り始めるアリアにキンジは少し、
困惑した。しかし、さっきまでの緊張が止まっていたのがわかり、
ほっとした。

「……それにしても、あの斬撃。私にも全く見えなかった……なに
か一瞬光ったと思ったら、いつの間にか私の目の前に大きな傷がで

きてたから、本当に怖かった……」

白雪は淡々と言うが、その斬撃の恐怖を一番味わったのだから普通ではなかった。体が小刻みに震えている。
キンジはそんな白雪を抱きしめ

「もう大丈夫だ。アイツはもういない。だから、安心しろ。もしも、アイツが戻ってきてても俺が守ってやるから……」

と言った。

強気ことを言ったが、正直あの神父に勝てる自信は皆無と言っているほどなかった。

見えない斬撃を繰り出し、おまけに『不可視の銃弾』^{インヴィジブル}まで使えるなんて、もはや化け物だ。確実に兄と同等の実力を有している。
そんな相手に勝てるのか？キンジの不安は募るばかりだった。

「キンジ、ジャンヌは逃がしちゃったけど、白雪は守れたわ。とりあえず任務完了ね。……運に救われたのかもしれないけど……」

アリアは珍しく沈んでいる。当然だろう。実力の差を歴然と感じさせられたのだから。もはや、勝負にすらなっていなかった。悔しいに決まっている。

神崎・H・アリア、生まれて初めての惨敗だった。

二の傷 見えざる殺しの刃（後書き）

今日は裏モードでませんでしたね。出る必要もありませんでしたが
.....

三の傷 神父と戦乙女に休息を

秋葉原。

サブカルを愛する者にとっては聖地と呼ばれるこの地。

一人の神父服の青年と銀髪の美少女が歩いていた。もちろんアルトとジャンヌである。

普段なら奇異な目で見られるアルトもここではほとんど誰の目にも止まらない。おそらく、アニメかゲームのキャラクターのコスプレだと思われるのだろう。

一部では並んで歩く二人を見て「リア充氏ね」という視線を送っている。しかし、アルトは気にも留めない。

「おい、アルト……なんでこんな妙な店ばかりある場所へ来たのだ？ その……デート……なら、他の場所でもよいだろう」

さすがに、この街の空気はジャンヌには少し辛かったのか、アルトに場所の変更を訴える。空気だけでなくジャンヌは自分に向けられる妙な視線にも気付いていたので、なおさら場所を変更してほしいと思っていた。

「どうやらこの場所には日本の全ての魅力があるそうです。私は、あまり日本のことを知りません。……しかし、デートと思って貴女を誘ったわけではないのですが、デートと思うってくれるなんて行幸です」

アルトは右横にいるジャンヌに対し、微笑みながら言った。

ジャンヌは自分の思っていたことが誤解だったと気づき、顔を真っ赤にしてそっぽを向いてしまった。
先ほどの会話からわかるように、ここへはアルトの希望で来ている。コスプレイヤーならまだしも、本当の神父であるアルトにはこの場所は無縁すぎる。ならどうしてここにいるのか？それは少し前にかかってきた一通の電話が原因である。

日本へ出発する一週間前。アルトは教会で必要最低限の荷物を纏めた後、教会を出ようとした。
その時――

トゥルルルル。トゥルルルル。

とアルトの携帯電話が鳴った。アルトの携帯電話は任務以外のことでほとんど鳴ったことがない。

追加任務か？そう思つて、電話に出ると

「もしも『はいはい。アーくん？りこりんだよ。ねえ、今から日本に行くんだって！そしたらあゝ、りこりんおススメの場所があるんだけど。聞きたい？ねえ、聞きたい！』」

電話相手のテンションの高さにアルトは思わず携帯電話を耳から遠ざけてしまった。アルトは五感全てが通常の人間の約五倍ほど高い。そのため、ただでさえうるさい電話相手のテンションボイスを耳元で聞いたせいで、耳がかなり痛くなる。未だに続く、耳鳴りと痛みに耐えながらもアルトは電話を再度耳に近づけた。

「……理子、元気があるのはいいいことですが、私の体をもう少し考えてくれませんか？耳が痛いです……」

『あははー。ごめんねー』

電話の相手……理子は全く悪くは思っていないような、言葉だけの謝罪をする。普通の男なら「カワイー！」となるか「ウゼエ……」となるかのどちらかだが、アルトはもう慣れてしまったので、スル

「し」用件は？」

『秋葉原には絶対に行ってね！あそこには日本全ての魅力があるんだよ！あそこに行けば日本を制覇したと言っても過言じゃないよ！あつ！それじゃあね！』

理子は言いたいことだけ言って、自分から勝手に電話を切った。

アルトはやれやれ、という顔をして携帯をポケットの奥に突っ込む。そして、日本をよく知らない彼はその『アキハバラ』という場所に興味を示したのであった。

「……なるほど、リユパン4世の入れ知恵か……」

ジャンヌはここに来た経緯を聞きはあつ、とため息を吐いた。そして、隣にいる男の素直さに呆れた。

アルトは戦闘でこそ恐ろしいが、普段は人を簡単に信じすぎる。腐っても神父だということだろう。しかし、相手が嘘をついている場合は自らの直感で、すぐに察知できるらしい。理子の言葉が嘘と判断できなかったのは、理子が自分の言葉を嘘だとは思っていないからだろう。

「ジャンヌ。そんな呼び方してはいけませんよ。あの子は嫌がりま
すし、私も何世なんて呼ばれたくありませんしね」

「わかつている。私はこれでも彼女が好きだからな。しかし、お前
はもう何世かすらわからないだろう？」

「あはははは……そうですね」

ジャンヌの言う通り、ヴァン・ヘルシングの名を持つ者は今何世か
すらわかっていない。理由はヴァン・ヘルシングという名、及び称
号を持つ者はその存在、与えられた任務、家系など全てが教会の裏
組織の中でも特一級機密事項にあたる。知っているのは、それこそ
教皇かその側近の一部くらいだろう。

故にアルトが今何世で、どのような家系に生まれたのか、などは自
らも知らない。もしかしたら本当の子孫ではないかもしれない。そ
う思いたくなるほど、何もかも隠されてきた存在なのだ。

「でも、何世かなんてどうでもいいですよ。今、こうして貴女の隣で歩いているのは私ですから」

「そ、そうか……は、恥ずかしいことを平気で言っなっ！」

アルトの言葉をジャンヌは口説き文句と誤解したらしく、上目使いでアルトを睨んで頬を赤らめた。

口説き文句らしき言葉を言った本人は、なぜ頬を赤らめる？といった感じで、全く意識していなかったようだが……

「あ、そういえば喉渇きませんか？私が奢るので喫茶店にでも入りましょう」

アルトは急に思い出したように言うと、ジャンヌの手を取って歩き出した。その瞬間に赤くなっていたジャンヌの顔はさらに赤くなり、周囲の「リア充氏ね」という視線はさらに増えていた。しかし、アルトは全く気にしない。

そして、一つの喫茶店の前にたどり着き、足を踏み入れた。

「お、おい、アルトッ！ここはやめろ！って、話を聞けえ――

――」

アルトは気付かなかったが、ジャンヌは気付いていた。ここはただの喫茶店でなく――

――メイド喫茶と書かれていたことを――

「「「おかえりなさいませ、ご主人様。お嬢様」」」

喫茶店に入ったアルトとジャンヌを出迎えたのは、給仕服を着た女性たちだった。

当然のごとくアルトは驚愕してしまい

「えっ、あ、はいっ。ただいま」

と、間の抜けた返事をしてしまった。

それを予想していたようにジャンヌは頭に手を当てて、やれやれと
していた。

奥に開いていた席に案内され、アルトはホットコーヒー、ジャンヌ
はミルクティーを頼んだ。

「……凄いですね。日本の喫茶店は、まさかメイドさんがいるなん
て……オシャレだとは思いますが……私には少々、刺激が強すぎま
す……。全ての喫茶店がこんな感じなのでしょうか」

「そんなわけあるかつ！ここが特殊なだけだ！大体、お前がちゃん
と看板を読まないからこんなことになるんだぞ！」

少し顔を赤くして、窓の外を見つめるアルトにジャンヌは姉が弟に
叱りつけるように言った。アルトは未だに狼狽している。

そして、こんなところに女性と二人きりで来てしまったことに今更
後悔していた。

「すみません……今回は完全に私のミスです……まさか、こんなと
ころがあるなんて……まさにカルチャーショック……」

ズズーン。といった効果音が付きそうなくらいに落ち込むアルト。そこまで、落ち込むことがあるか？と疑問だが、ジャンヌもこの男の性格はよく知っているの、特に気にはしないようにしている。それでも、さすがに気の毒になってきたので、何か話題を……と、考えているうちに注文した品が来る。

「ほ、ほら、アルト！お前の大好きなコーヒーが来たぞ。飲みまわって、カフェイン中毒にでもなんでもなってしまえ！」

（何を言ってるんだー！私はー！）

ジャンヌはアルトの気を紛らわすためとはいえ、わけのわからないことを言っている自分が嫌になり両手を頭に付きながら、ネガティブオーラを出し始めた。

口では、なにやら呪文のような言葉をぶつぶつと唱えている。周りの客はその様子を見て、さぞかし妙なカップルだと思ったことだろう。

「うう、カフェイン中毒にはなりたくありませんが。コーヒーは譲れません……神よ！ミルクを入れずに飲むことをお許してください！」

アルトは途中から意味不明な祈りを捧げながら、コーヒーに口をつけた。なぜ、あんな祈りをするかって？ミルクを入れた方が体に優しいかららしい。

ジャンヌもアルトの様子を見て回復したようで、優雅にミルクティーを飲んでいた。

不意に、アルトはコーヒーを皿に置きジャンヌの正面に向き直り、真面目な顔をした。何かを決意したような顔だ。

「な、なんだ、アルト？ そんな真面目な顔をして……まさか！」

ジャンヌはアルトの顔を見て少女漫画的な想像をした。こんなシチュエーションの王道は――

「ジャンヌ。私と……結婚……してくれませんか？」

夕暮れに少し近付いた時間。アルトは私を呼び出して言った。本当にいきなりだった。急に真面目な顔をしたと思ったら、なんの前触れもなくそう言った。

「そ、そんな。私たちはまだ……っ、付き合ってもいないのだぞ！？」

そう、私とアルトはまだ恋人でもない。いままで、いろいろな所へ

一緒に行ったが、お互いに恋人としてでは無い。せいぜい、親友という程度だっただろう。だが、アルトは本気のようにうだ。顔を見ればわかる。

「私は気付いてしまったのです……本来神父が持つてはいけない感情を……貴女に……」

アルトは珍しく、恥ずかしそうな顔をして言った。神父が持つてはいけない感情？疑問に思った私は少し躊躇しながら聞いた。

「な、なんだ、それは……？」

「誰か一人を愛する……という気持ちです。神に仕える役職である私には、本来全ての人を愛すべき義務があります。しかし、私は……貴女を一人占めにしたい……私を……愛してもらいたい……」

アルトは少しぎこちなさそうに微笑む。それを見ると、私の胸の奥がはねる。そうか……私もなんだな……だったら、答えは決まっている。

「……わかった」

「え？」

返事をする、キョトンとした様子で、アルトは私を見る。信じられないのだろうか？ だったら、私はさらに言葉を紡ぐ。

「私も……お前のことが……その……す、好きだ。だ、だから、私も……お前だけに、愛してもらいたい……」

私は自分で言ったことが、物凄く恥ずかしくなり、うつむく。そのせいで、アルトの顔は見えないが、きつといつも通りに微笑んでいるだろう。

「……ありがとうございます。では……」

アルトは細い指を私の頬に当て、ゆつくりと顔を起こす。そして、お互いの唇があと2 cm、1 cm、0、5 cm――

「――、ジャンヌ？あゝい、起きてますか？」

アルトの声により、ジャンヌはハッ、と現実に戻る。アルトのコーヒーがなくなっていることから、結構な時間、意識がこちらへ行っていたようだ。

ジャンヌは少し狼狽すると、「ゴホンっ！」と咳を吐いてから真面目な顔し、正面を向いた。

「す、すまない。少々、考え事をな……それで？なんの話だ」

「あゝ、本当ならあまりこんなことをしたくないのですが……」

そう言うアルトの顔は少し、ばつの悪そうな顔だった。言うべきか、言わないべきか迷っているようなようにも見えた。

「なんだ、早く言え。別に何を言われても驚かん」

ジャンヌはそう言うが、想像通りのことを言われたら確実に驚くだろう。そんなことを知らないアルトは「わかった」とでも言いたげな顔をして言った。

「あゝ、えと、自首してくれませんか？」

「……………は？」

ジャンヌはアルトの口から飛び出した、言葉が信じられなかった。とりあえず確認のためにもう一度、聞くことにした。

「待て、自首というのはあの自首か？自らの非を認めるという行為だろう？」

「ええ、そうです。その自首です」

「ふっ、ふざけるなああああああああ！！！」

ジャンヌはテーブルから身を乗り出し、アルトの襟をつかみ揺さぶった。脳震盪が起きてもおかしくはないくらいの速度での揺さぶり方だった。

アルトは「あ、あ、あ、あ、あ」と言いながらも、何か言いたげだったが、ジャンヌには分からなかったので、揺さぶりは止まらない。

「どうしてだ！どうしてなんだ！？なぜお前が私に自首しろなんて言うんだ！お前は私が一生牢獄生活でもいいのか！？」

「あ、あ、あ、あ、あ、お、お、そら、く、し、ほう、とり、ひ、ひ、き、で、なん、と、か、な、り、ま、ま、ま、す、す、す」

ピタッ。揺さぶりが止まる。とりあえず言おうとしていた言葉が伝わったようだ。アルトは首がかなり苦しかったようで「ぜえゝぜえゝ」と息をして酸素を必死に取り込んでいる。いくら人外の体をしていても酸素がなければ生きていることは不可能だ。

「司法取引か。しかし、なぜそんなことをする？」

アルトは未だに「ぜえゝぜえゝ」としているが、ジャンヌの問いに答えようと必死だった。正直、かなり痛々しい姿だ。ジャンヌが「落ち着いてからでいい」と言つと、深呼吸をしようやく落ち着いた状態に戻り、言葉を発する。

「司法取引をすれば、おそらく東京武偵高に入学することになると思います」

「だから、どうした？私は今更、学校に行くことなど考えてないぞ」

ジャンヌは少しムツ、とした表情で言った。どうやらあまり学校へは行きたくないらしい。しかし、アルトは説得をする。

「学校はきつと楽しいですよ。それに、どうせ通えて一年です。そのくらいは学校へ行つてはくれませんかね？」

アルトはこれからの戦いに巻き込みたくはないのだろう。絶対とは言えないが、武偵校にいれば安全は確保される。それくらいはジャンヌにもわかった。

「……はあつ。わかった。お前にそこまで言われると言う通りにしないわけにもいくまい。ただし、自首するまで、私は自由だ。いいな？」

「了解しました」

しばらくして、会計を済ませた後、アルトはジャンヌに嫌というほど振り回され、ヘトヘトになってから、ジャンヌを送り届けた。

これはジャンヌ・ダルク30世が東京武偵高校に入学する、少し前の話である。

三の傷 神父と戦乙女に休息を（後書き）

激戦前の閑話といったところでしょうか。感想、評価などお待ちしております。

四の傷 死神の唄を貴方に

ジャンヌが自首し、司法取引をした数日後。

アルトこと、アルトリウスは『ヤツ』の隠れ家を探していた。『ヤツ』とは、自分の先祖代々からの因縁の相手であり、もう一人の自分の同族を蔑にしたヤツだ。かそく

ヤツは普段、何かに擬態しているらしく、全く気配がつかめない。だから、怪しそうな建物や場所をしらみつぶしに探すしか方法が無い。

次はどこへ行こうか？そんなことを考えて、公園の一角で地図を広げていると、急に電話が鳴る。非通知だ。怪しみながらもアルトは電話に出る。

「はい。もしもし？」

『アルトだな？私だ』

聞こえてきた声はついこの間別れた、ジャンヌ・ダルク30世ことジャンヌのものだった。アルトは、なんだかんだ言って心配症なので、学校でうまくやれているか心配だったが声を聞く限りはそんなことはなさそうだ。

自然と頬が緩む。やはり、こうして話せるのは嬉しいのだろう。

「久しぶりです。元気ですか？」

『まあまあだ。別につまらなくはない。だからと言って面白いわけでもないんだぞ?』

「それはなにより。普通が一番ですよ」

アルトは近くのベンチに腰掛ける。さっきまで脳を使い過ぎていたのだろう。目を閉じて、安らぐように会話をしている。

『本題だ。お前、ブラドの情報が知りたいのだろう?』

——ブラド。その言葉を聞いた瞬間、アルトの閉じていた目が開かれ、鷹のように鋭い目つきに変わった。これから聞くことは一字一句聞き逃さないという意味が感じてとれる。

「何か知っているのですか?」

『特に詳しい情報ではないが、横浜郊外に『紅鳴館』という洋館がある』

「その館が『ヤッ』と何の関係が?」

『紅鳴館はブラドの別荘の一つらしい。だが、ブラドはしばらく帰ってきていないようだ』

「そうですか……」

ヤツの手がかりが少しでも見つかったのはいいが、しばらく帰ってきていないということは、近々帰ってくる確率も低い。やはり、決定的なものではなかったので、アルトは少し落胆した。それでも、情報が得られたことには違いないので、アルトは礼を言う。

「ありがとうございます。少しでも情報は欲しいところでした」

『別に礼には及ばん。そういえば、遠山キンジたちもブラドを追っているようだ』

何故、彼らがヤツを追う必要がある？神崎・H・アリアの差し金か？いや、しかしまだあの実力程度でヤツに挑もうなんて、さすがに無謀だとわかるはず……

アルトは彼らがイ・ウーの実質No.2を追う理由が全くわからなかった。それを補足するようにジャンヌが言う。

『どうやら、ブラドは理子の大切なものを奪ったらしく、それを取り返すために遠山キンジとホームズが協力をしたらしい。更に詳しいことはわからん』

「……そうですか、理子の大切なものを……」

アルトの顔は悲しみに満ちていた。理子はブラドに監禁されたあげく、大切なものまで取られたのだ。おそらく、理子の言っていた母の形見の品だろう。

胸が痛むと同時に怒りも湧いてくる。

「ありがとうございます。貴女と話せたことも嬉しかったですよ。それでは」

『ああ、それではな。……絶対に死ぬなよ』

ジャンヌは最後に命令のような言葉を残し、電話を切った。アルトは「わかっていますよ」と心でつぶやき、薄く笑いながら携帯電話をポケットに押し込んだ。

「紅鳴館……嫌な名前ですね」

紅とは血のこと、鳴というのは叫びのことだろう。そう思うと吐き気がしてくる。相変わらず悪趣味な名前だ。さぞかし、不気味な館なのだろう。

「……思っていたより、決戦の時は近そうですね……」

アルトは空を見上げる。

さっきまでは快晴だった空には暗雲が立ち込めてきていた。ゴロゴロと雷鳴も鳴っている。アルトはそれを憎々しそうに見つめる。

「show down・Vlad？ epe？（決着をつけましょう。串刺し公）」

アルトは挑戦の言葉を空に向け言い放つ。それから、地図を一目見ながら、胸にあるいつもとは違う感触を確かめた。
行く先は決まった。装備も揃っている。

——紅鳴館。宿敵の住処に向かって、アルトは歩き出した。

紅鳴館に潜入していた、キンジ、アリアは目的の品——つま
り、理子の十字架を手にし紅鳴館を去った後、理子のアジトへ行く
ためにタクシーで横浜駅にほど近い横浜ランドマークタワーへ向か
った。

理子は屋上で待っているらしいので、キンジは階段を上った。
当然のごとく、立ち入り禁止の場所なので人の姿は見当たらない。

「キーくうーん！」

とてててっ！

蜂蜜色の髪を風になびかせながら、改造服を着た理子がキンジに駆
け寄る。

そして、ぼふっ！っという感じで抱きつく。

「やっぱりキーくんとアリアは名コンビだよ！理子にできないこと
を平然とやってのける！そこにシビれるあこがれるウー！」

理子は大きなふたえの瞳を輝かせて、胸元からキンジを見上げる。

「キンジ。さつさと十字架あげちゃって。なんかソイツが上機嫌だとムカつくわ」

「おーおーアリアんや。キーくんを取られてジェラシーですね？分かります」

誰だよアリアんって。

そつ心の中で突っ込むキンジの胸に、理子はアリアを横目で見ながら頬ずりしている。

アリアは何やら叫んでいるが、キンジはそれを背に、胸ポケットから青い十字架を出した。

「これだろお望みの物は。やるから離れろ」

十字架を見た理子は、声にならない喜びの声を上げたかと思うと――
――首に着けていたチェーンに手品のように素早く繋いだ。

「乙！乙！らん・らん・る――」

理子は最高にハイってヤツになり、喜びでアリアとキンジの目の前をジャンプしている。その度にスカートがヒラつくので、キンジは目のやり場に困っていた。

「理子。喜ぶのはそれくらいにして、約束は——ちゃん
と守るのよ?」

理子の様子にかなりイラついていたらしいアリアが、こめかみをビクビクさせながら釘を刺す。

「アリアはほんと、理子のこと分かってなあ〜い。ねえ、キーク
うーん」

理子は何やら怪しげに笑って、キンジを手招きする。
キンジが近づくと——髪をカチューシャのように留める、大
きな赤いリボンを差し出す。

「お礼はちゃんとあげちゃう。はい、プレゼントのリボンを解いて
ください」

理子の意味不明な動きにウンザリ来ていたキンジが、しゅる。
リボンをテキトーに解くと。

「くふっ！」

——ちゅ！

いきなり理子が顔を斜めに傾けたかと思うと、キンジにキスした。

「……………！」

普段とのギャップにキンジは一瞬で、ヒステリアモードになってしまった。

「ふはぁ」

唇を離れた理子が、キンジの目の前、1センチの所で笑う。まだ、鼻と鼻が触れている状態だ。

「り……りりりりり理子おっ！？」

非常ベルのようにアリアが叫んだ。

「な、なな、なな何やってんのよいきなり！」

——と怒鳴るアリアに理子はオフザケ何一つ返さず——
たたんっ、たたっ。と屋上のほとんど縁とも言える場所を回り込むように、華麗な側転を切った。

そして、キンジたちの退路を塞ぐように、階下へ続く扉を背に立つ。

「ごめんねーキーくん。キーくんがさっき言った通り、理子、悪い子なお——。この十字架さえ戻ってくれば、理子的には、もう欲しいカードは揃っちゃったんだあ」

にい、と……ハイジャックの時と同じ目で、嗤^{わら}った。
キンジは地下倉庫での通信で言ったことを思い出す。

「もう一度言おう——『悪い子だ、理子』。約束は全部ウソだった、って事だね。だけど……俺は理子を許すよ。女性のウソは、罪にならないものだからね」

とか

「とはいえ——俺のご主人様は理子を許してくれないんじゃないかな？」

キンジが横目にアリアを見れば、言うまでもなく怒り心頭といった表情。

同時に、何かショックを受けたような顔で石化している。

「アリア」

パチンつと指を鳴らし、呼ぶと。

はっ。と石化が解け、真っ赤なままで犬歯をむいた。

「ま、まあ……こうなるかもって、ちょっとそんなカンはしてたけどね！念のため防弾制服を着ておいて正解だったわ。キンジ、闘るわよ。合わせなさい」

「くふふつ。そう。それでいいんだよアリア。理子のシナリオにムダはないの。アリアとキーくんを使って十字架を取り戻して、そのまま2人を斃す。キーくんも頑張ってるね？せっかく理子が、初めてのキスを使っただけでお膳立てしてあげたんだから」

「先を抜いてあげる、オルメス————ここは武偵高^{シマ}の外、その方がやりやすいでしょ？」

理子は右、左。

スカートの中から、名銃・ワルサーP99を二丁取り出した。

「へえ、気が利くじゃない。これで正当防衛になるわ」

鏡像のように、アリアも、右、左。

小さな手に不釣り合いな、漆黒と白銀のガバメントを抜く。

「風穴開ける前に——1個だけ教えなさいよ。なんでそんなモノ欲しかったの。何となく分かるけど……ママの形見、ってだけの理由じゃあないわよね？」

アリアは理子が胸にさげた十字架を拳銃で指す。

理子はワルサーを口元に寄せて、笑った。

「——アリア。『繁殖用牝犬』って呼ばれたこと、ある？」

「繁殖用牝犬……？」

「腐った肉と泥水しか与えられないで、狭い檻で暮らしたことある？ほらあ。よく犬の悪質ブリーダーが、人気のない犬種を殖やしたいからって——檻に押し込めて虐待してるってニュースがあるじゃん。あれだよ、あれ。あれの人間版。想像してみなよ」

大仰な身振り手振りを交えて、理子は笑いながら語る。

早送りのように流れる雲の下、ランドマークタワーの屋上に異様なムードが漂う。

「何よ、何の話……？」

理子を制するように、アリアが両手を前に出す。

——それを、合図にしたように。

理子は突如悪魔のような表情になった。

キンジはそれを見て、ハイジャックの時を思い出す。

「ふざけんなっ！あたしはただの遺伝子かよ！あたしの数字の『4』かよ！違う！ちがうちがうちがう！あたしは理子だ！峰・理子・リユパン4世だっ！『5世』を生むための機械なんかじゃない！」

理子は途中から……虚空に向かって、アリアではない誰かに叫んでいた。

もはや会話は成立していない。

ピカッ！ゴロゴロ……

海の方からかすかな雷鳴が響き、アリアがビクンと竦んだ。

「……『なんでそんなモノが』って訊いたよね、アリア」

にい、と理子がアリアを睨んで笑う。

「この十字架はただの十字架じゃないんだよ。これはお母さまが、理子が好きだったお母さまが、『これは、リユパン家の全財産を引き換えにしても釣り合う宝物なのよ』って、ご生前に下さった——一族の秘宝なんだよ。だから理子は檻に閉じ込められてた頃も、これだけは絶対に取られないように……ずっと口の中に隠し続けてきた。そして——」

そこまで言った理子は、ツーサイドアップの髪の毛のテールを——
——わささつ、と、ヘビのように動かし始めた。
神話の魔物・メデューサのような恐ろしい光景に……キンジは一步退く。

「ある夜、理子は気付いた。この十字架……いや、この金属は、理子にこの力をくれる。それで檻から逃げ出せたんだよ。この力で……」

理子の左右のテールが、じゃき、じゃき、と背の襟の下に隠していた大振りのナイフを抜く。

カドヲ
双剣双銃。

アリアと同じだが、異なる意味を持つ2つ名の通り、理子は4つの武器を構えた。

「さあ……決着をつけよう、オルメス。おまえを斃して、理子は今日、曾お爺さまを超える。それを証明して、自由になるんだ……」

左でアリア、右でキンジを狙った理子が、

「オルメス、遠山キンジ——お前たちは、あたしの踏み台になれ！」

と、叫んだ時。

バチッッッッッッ——！？

小さな雷鳴のような音が上がった。
愛らしい顔をいきなり強張らせた理子は、半分だけ……ゆっくり、
振り返った。
そして、

「……なん……で、お前が……」

と呟き——がくん。

その場に膝をついた。

理子の小さな身体が、前のめりに倒れて……見えた男は——

「小夜鳴先生——！？」

キンジは目を大きく開き、驚愕した。

同じ頃――。

バチツツツツツツ――！？

煌めく光と雷鳴が上がる音が、アルトには感じ取れた。
確証はない。だが、これは――

「ククククッ。ヤツの気配だ……」

周りはすっかり夜。待ちに待った因縁の相手との会合が近い……心が昂る。

そして、今のアルトは髪の色、目の色なども変化し、完全に『彼』となっていた。

「……そこかあ。逃げんじやねエぞ——乙女じやねえンだ。『死神』から逃れようなんざ神にも祈るなよ？」

『彼』は、長く鋭い爪の生えた指をボキボキと鳴らす。

口を三日月のように曲げ、アルトとは真逆である——残酷かつ愉しそうな笑みを浮かべながら、その魔眼は少し離れた高い建物……横浜ランドマークタワーを確実に捉えていた。

「Gib deine Hand, du sch?n und zart Gebild——」

『彼』はアルトの時と変わらない、美しい声で呟くように唄う。

お金を取れてもおかしくはないくらい、繊細で、透き通った声で唄うが、聞こえた人の中に歌詞、意味を知っている人はほとんどいないだろう。

これは『死神』が手を伸ばして乙女に安らぎ——つまり、『死』を与えると言っているのだ。死を恐れる乙女に死神が死は安らかな憩いに導くものと優しく誘う。そんな歌詞だ。

だが、『彼』にはこの歌のように『死』は与えるにしろ、安らぎは与えるつもりはないのだろう。未だに残酷な笑みを浮かべている口元からは誰でも想像できた。

「Sei gutes Mut s! ich bin nicht wild……」

急に歌が止まる。終了したわけではない。わざと、最後まで唄わずに止めたのだ。

残りのフレーズは——ひとつ

「最後はお前に聴かせてやる……じゃねえ。聴かせてえんだな、俺が」

『彼』はククククツと笑い、民衆の闇へと姿を消した。

吸血鬼に忍び寄るのは『狼』か『死神』か、それとも——

四の傷 死神の唄を貴方に（後書き）

やっとブラド戦に入れる……今回は出番が少々少なかったような気が……

五の傷 魔笛よりも鎮魂歌を

「くっ……この！」

アリアは小夜鳴の変身した姿——ブラドの周囲を回りつつ、二丁拳銃を撃ち続けている。

だが、その弾丸は案の定、ブラドに何らダメージを与えていなかった。

キンジは、ブラドの身体にある異変を横目で見ながら、アリアとヘリポートの縁で合流した。

キンジたちが揃ったのを見たブラドは、ニヤリと笑い……背を向け、屋上の隅に立つ携帯電話用の基地局アンテナの方へと向かった。何か企んでいるだろうが、それを止めに行こうとはしない。

「……あいつ。あたしをあの爪で突き刺すチャンスが何度もあったのに、掴もうとしてきたわ」

「生け捕りにするつもりだったんだろう。ヤツは名家の血のコレクターだからな」

「——血統書付きのイヌネコじゃあるまいし」

アリアはぎり、と犬齒を向く。

「……アリア。ブラドの体には4か所に弱点がある」

ジャンヌから『非常時だけに共有しろ』と言われていた情報をキンジはアリアに耳打ちする。

「弱点……ですって？」

「ああ。その4か所を全て同時に攻撃すれば、きっと斃せる。イ・ウーのナンバー1はそうやってアイツを従えたいらしい」

「ど、どこで聞いたの、そんな話」

ジャンヌのことを説明する時間はなかったので、ヒステリアモード中のキンジは、ぐい、とアリアの両肩を掴み自分の方へ向かせた。何かされるのかと思ったのか、肩にも力が入り、身構えている。

「な、なによなにつ」

「武偵憲章1条。仲間を信じ、仲間を助けよ。詳しい説明は——
——後だ」

「わ、分かってるわよ。そ、そそ、そんな近くから見ないで」

赤面しているアリアを解放し、ブラドの全身にある『目玉模様』を確認する。

「あれだ、あの目玉の模様だ……！」

だが、ジャンヌも分からないと言っていた4つ目が、見当たらなかった。

アリアもそれに気付く。

「キンジ。でも、3つしかないじゃない」

「4か所目がどこにあるかは……わからないんだ。戦いながら探すしかない。同時攻撃する時は——アリアがあのお肩の目をやってくれ。俺が脇腹と第4の目をなんとかする」

「……分かったわ。でもあたし、実はもう銃弾が2発しかないの。だから同時攻撃の時は『撃て』って言って。それまで、弾切れしたフリをする」

ばきん！

策を模索していたキンジたちが思考を中断され振り向く。向こうではブラドが5メートルはあろうかという携帯基地局アンテナを屋上からむしり取っていた。

ごすん、とそれを槍のように足元へ落とすと、地響きがキンジたちの元まで届く。

アンテナはもはや、鬼の金棒と化していた。まさに、鬼に金棒ということだろう。

「……人間を串刺しにするのは久しぶりだが、串はコイツでいいだろう。ガキ共、作戦は立ったか？銀でもニンニクでも何でも持っていこい。オレはこの数十年間の遺伝子の上書きで、何もかも克服済みだ。まア……いまだに好きではないがな」

「へえ。じゃあ、たっぷり食らえや」

ズガガガガガガガガガガガガガッ！！

いきなり聞こえてきた挑発的な声とともに、けたたましいまでの銃声が響きわたる。音が明らかに9mmパラベラム弾や45ACP弾

のようなハンドガンに使われる弾の音ではない。マグナム弾でさえもここまでけたたましい音はしないだろう。放たれた銃弾は全てブラドに直撃する。

「がああああああああッッッ！」

アリアの二丁拳銃の銃撃をいくら浴びても、声すら出さなかったブラドが夜の闇を貫くような悲鳴を上げる。撃たれた箇所は、左肩、右腕、鳩尾、左腿そして右脛の部分。どこも、野球ボールくらいの穴が空いていた。キンジとアリアはそれを見てから、やっと放たれた銃弾が5発ということに気付く。そして、銃声の下方向——後ろ向くと

「な………なんで、あんたが………」

「マジかよ………」

「……アーくん」

落ちるか落ちないかのギリギリの縁。そこに銀髪、紅眼の姿が変化したアルト——つまり、『彼』が立っていた。

『彼』は目の前で苦しんでいるブラドと驚愕している三人をまるで目に見えていないように放って、呑気に右手で持った漆黒でロングバレルのリボルバーに弾丸をゆっくりと詰めていた。おそらく、そ

れがブラドを撃ち抜いた銃なのだろう。

「へ、ヘルシングウウウウウウウウウウツツ!!」

さっきまで苦しんでいたブラドが憎々しそくに、『彼』を見ながら叫ぶ。『彼』に開けられた穴はもう治りつつあった。

「あらら。もう治っちまったのかよ。やっぱ、威力だけあるただの銀弾じゃ、ムリってか？」

弾込めが終了し、全弾装填されたシリンダーをカシンツ、と元に戻しながら、「クッククックツ」と笑う。

さすがにこんなくらいでくたばってもらっては、困る。

『彼』は怒るブラドを一瞥すると、自分を見ているキンジとアリアに気付いた。

「……なんだクソ餓鬼共。吹っ飛ばすぞ？」

『彼』は2人を睨みつけて言った。

普通なら冗談だが、今のアルトならやりかねない———そ

う思った理子が口を挟む。

「だ、だめだよ、アーくん。この2人は理子の獲物なんだから!」

「あ? あゝああ、コイツ等理子の獲物かよ。だったら、やめとくわ。他人の狩りを邪魔するほど無粋じゃねえしなあ。よかったな、クソ餓鬼共。俺様に狩られなくてよ」

『彼』はそう言い放つと、狩りの対象である、『吸血鬼』を狩るためにキンジとアリアの前へ出る。
未だに2人はこの前の神父の変わりように驚いていた。

「待たせたな、筋肉野郎。ああ、悪い悪い。筋肉に失礼だったなあ。ククククククククッ」

あきらかに改造された漆黒のリボルバーを向けて、ブラドに挑発する。ブラドは怒りに震えているのか、体を震わせて『彼』を睨みつけている。

「人狼ヴァン・ヘルシング……俺が唯一奪えなかった……絶対に奪ってやるッ!」

ダッ!

ブラドが巨体に似合わないものすごいスピードで金棒を担ぎながら、『彼』に迫る。同時に『彼』もブラドへ向けて突進する。
『彼』の走った地面は所々亀裂が入り、今にも崩れ落ちそうになっていた。

「ふんッ！」

ブン、と金棒が振り回される。キンジやアリアのような普通の人間なら、絶対に避けなければいけない重い一撃。しかし、『彼』はそれを避けずに、持っていたリボルバーを金棒の中心に向けて――
――撃った。

「何ッ!？」

バギン、という金属が欠ける音がし、金棒は半分は地面に落ちた。長いリーチを失った金棒は『彼』に届くことはなく、もはや、金棒は超近接戦闘用にしか使えない、棒と化していた。

啞然とするブラドに対し、『彼』はニイ、と邪悪に笑う。人狼状態となり、人格も裏に代わったアルトには力しかない吸血鬼など、ただの雑魚にしか過ぎない。

『彼』は一気に接近しブラドの額に銃口を当て、言った。

「銀製の454カスール弾。威力は弾丸の中でも首位を争うんだぜ？いくら銀に強かるうが、コイツは痛えぞ」

「ッ―――!？」

ズガンッ、ズガンッ！

「ギヤアアアアアアアアアアッ！」

454カスール弾のけたたましい音とともにブラドの悲鳴が響く。撃ちこまれたところは徐々に回復していくも、再度弾丸を撃ち込まれる。ブラドはこの攻撃によって死ぬことはないが、何度も何度も痛みを味わうことになる。ある種、死ぬよりも苦しい攻撃だった。

「クハハハハハハハハハッ！痛いか？痛いよなあ。でもなあ、俺様の同族を虐^{かぞ}げてんだったら、これくらい耐えろよおッ！」

ズガンッ、ズガンッ、ズガンッ！

『彼』が銃弾をブラドに撃ち続ける様子をアリア、キンジ、理子の

3人は黙って見ているしかなかった。下手をして割り込んだら、殺させかねない。

しばらく沈黙状態だったか、アリアが口を開く。

「……なんていうか、454カスール弾をのけ反らないであんなに連射するなんて……あの精神不安定な神父さま、どんな化け物なのよ……」

「まあ、アーくんの裏モードは本当に化け物だし、それに血がブラドを殺したがつてるから」

「血？アイツもなんかの子孫なのか？」

キンジが血の言葉に反応する。目の前では「ヒヤッハー！」と奇声を上げて、さっきのリボルバーとは違う漆黒と白銀のハンドガンをフルオートで連射しまくっている凶神父がいる。

「まあ、そうだね。アーくんはヴァン・ヘルシングの子孫だよ。名前くらいは聞いたことあるんじゃない？オルメスも」

「ヴァン・ヘルシング……吸血鬼ハンターっていうヤツね。ブラドが存在しているからそんなヤツもいるかとは思ってたけど……まさか、目の前にね……」

「……アリア、あんま驚かないんだな」

キンジは見た目こそ落ち着いているが、内心かなり驚いている。なぜなら、目の前で行われているのは、それこそアリアと理子のように先祖代々から続く因縁の戦いなのだから。だからこそアリアの落ち着きようが不思議だった。

キンジの問いにアリアは、肩をすくめて

「驚いてるわよ。静寂の切断魔がヴァン・ヘルシングなんて、全く想像できなかったし。でも、今更大声上げても仕方ないでしょ」

と、言った。

アリアも同じだとわかり、キンジは少しほっ、とする。驚いているのが自分ひとりだとさすがに男としてのプライドが傷つく。

「！？キンジッ！ブラドが何かするわ。気を付けて！」

アリアに言われ、キンジは『彼』と戦闘していたブラドを見る。

「……ヘルシング。正直、人狼状態のお前に勝てそうにはないな……だから……人狼のお前にはご退場願おうか！」

ぎろッ——と、黄金の双眸が『彼』を見る。

「ワラキアの魔笛に酔え——！」

言い終わるとブラドは、大きく、大きく、身体を反らし——

——ずおおおおッ、と。

巨大なジェットエンジンのような大きな音を立てて、空気を吸い込み始めた。

「ヒュウ」

胸がバルーンのように膨らんでいく様子を『彼』は何もせず、ただ口笛を吹くだけで見ていた。

ビヤアアアアアアウヴアイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイ——ッ——！！

咆哮——。

「……くっ」

目の前に来たブラドをアルトは憎々しそうに睨みつける。人狼状態での疲労が溜まったのか、はぁ、はぁ、と苦しげに息を吐いている。ブラドはその様子を満足げに見つめ、金棒を上へと持ち上げる。

「お前は中々凄いヤツだった……だがな、あくまでそれはもう一人のお前だ。お前ではない。さらばだ。現代のヴァン・ヘルシングゲツ！」

金棒がアルトの頭上へと振り下ろされる。いくら人外の身体でも、真上から潰されてしまったら再生できない。

キンジとアリアは思わず目を瞑る。目を開けたら見えるのは血の水溜り

ジャギイイイイイイイイイッ！

ではなく、石粒程度に切り刻まれた金棒と――
――平然と立つアルトだった。

「な……に……！？」

見えないものに金棒を切り刻まれたブラドが茫然と立ち尽くす。これで、ブラドは武器を完全に失った。

アルトはそんな様子のブラドに、コツ、コツ、と音を立てて近づく。両手の袖からは、ナイフほどの幅の小刀が飛び出している。

ブラドはもちろん、キンジ、アリア、理子も得体のしれない恐怖に襲われていた。この場にいるものは全て切り刻まれる。そういった具合のおぞましいものだった。

「……確かに、裏の私の方が銃器の扱いは上手いでしょう……」

一歩、また一歩と、砕けた金棒の破片を足で碎きながら、ブラドへと近づいていく。

ブラドはその巨体を無意識のうちにじりじり、と後ろへ後退させていた。

しかし、背後には何もない。後ろに広がるのは、車の行き来する横浜の街。

逃げ場はない――

「しかし――」

アルトが、ブラドにたどり着くまで残り5 m、4 m、3 m……『死』が1 m、1 mと近づいてくる。

「く、来るなあッ！」

ブラドは最後の抵抗として、大きな拳を突き出し、アルトに殴りかかった。しかし、アルトに避ける素振りはない。いや、当たらないと分かっていたのだ。

「え……………」

ストーン。ビチャ。という音がする。落ちたのは、突き出された右腕。滴るのはブラドが何百年も集めた血^{もの}。

「が……がう、ああ……う」

目の前の光景が信じられないように、ブラドが言葉にならない叫びを上げようとする。しかし、『死神』は目の前に迫っていた。

「この——」

ブラドは死を覚悟し、目の前の『死神』に言葉をぶつけようとする。だが、アルトはそんなのを機にした素振りもなく

インヴィジブル
『見えざる一線』

見えないない刃を振る。直後、舌の『目玉模様』までもを繋いだひとつの線がブラドに刻まれ、そこから血が噴き出す。今までとは違い、音も光もない一線だった。

「化け物めッ!!」

怨念の言葉を残し、数百年間生きた『吸血鬼』は足から前へと崩れ落ちた。最後の怨念の言葉に対し、吸血鬼の返り血で染まった青年神父は――

「……聞き飽きましたよ。それ」

と、つまらなそうに答えるだけであつた。

——— 今、この瞬間。代々受け継がれてきた『ヴァン・ヘルシング』という名の悲願が達成された。

五の傷 魔笛よりも鎮魂歌を（後書き）

この回で新登場したりボルバーについて紹介します。

アルト専用改造大口径リボルバー：ディストレーション（歪み）

改造前のモデルはトーラス社のレイジングブル。バレルが改造されており、多角形になって、7cmほど延長されている。454カス
ール弾を発射する超高威力リボルバー。

銃身長134mm ライフリング 6条右回り 装弾数 5発 作
動方式 ダブルアクション 全長 274mm 重量 1440g

反動がもの凄く、人狼状態のアルトにしか使いこなせない。（裏
じやなくてもでも平気）

兄弟と言える銃が存在するが、それは後ほど……

六の傷 目的の終わりと役目の始まり

横浜ランドマークタワーの屋上。立っているのは4人。

1人は漆黒と白銀のガバメント二丁を構えたピンク髪の少女、神埼・H・アリア。

2人目はバタフライナイフと、とベレッタM92Fを構えた黒髪少年、遠山キンジ。

3人目は特に何も構えてはいない金髪の少女、峰・理子・リュパン。

そして、最後——4人目は両手をポケットに突っこんだまま、何も構えず、ただ眼を閉じている黒髪の青年神父、アルトリウス・V・ヘルシング。

少年少女が向けた3つの銃口は全てアルトに向けられていた。彼の足元には地にひれ伏した吸血鬼。それはつい先ほど、アルトが狩った『獲物』だった。死んではいないだろうが、ピクリとも動かない。

「『ファントム・キラー』 静寂の切断魔！アンタと『無限罪のブラド』を逮捕するわ！ママの裁判の証言台に、耳引っ張って引きずってでも立たせてやるん

だから！」

アリアが叫ぶ。しかし、アルトは全く気にした様子はない。視界に入っていないのか？と思わせるくらいは無関心だった。

アリアはそんなアルトの態度に腹を立てるが、キンジがそれを宥める。アルトの眼はまだ閉じたままだ。まるで瞑想しているかのよう
に、微動だにしない。

「――残念ながら」

アルトの口から言葉が発せられる。直後、閉じていた眼が開かれ、
3人の姿を映し出す。

アリアとキンジはその素振りに警戒を強め、自らの獲物を構え直す。
この2人はアルトの技の威力をついさっきこの目で見た。気を抜い
ていたら、一瞬で殺される。いや、気を抜かなくても一瞬で殺され
るかもしれない。そう思っていた。

「ただの弾丸とただの銃では、私は斃せません。絶対に」

2人はこの言葉を刃で弾丸を切るから、死なないと勘違いしている。
違うのだ。今は人狼状態ではないが、アルトはただのハンドガン程
度の銃弾をいくら身体に撃ち込まれようが、首を吹っ飛ばされない
限り、すぐに回復してしまう。

ブラドと同じようにアルトも人外の身体をしている。唯一効くのが、
狼男や吸血鬼の弱点である銀。アルトは純粹な狼男ではないし、吸

血鬼でもないため弱点の克服ができていない。故に銀製の弾丸を心臓へ確実に撃ち込むしか殺す方法はない。

「……やめておきなよ、アリア。キーくんも。アーくんにも2人が絶対に敵うはずがない……ブラドとはレベルが違いすぎるよ。それに、アリア。もう弾丸ないんでしょ？」

「っ……………！」

理子に真実を言い当てられ、アリアは悔しそうに歯を食いしばる。アリアの弾丸は残り2発。とてもではないが戦闘できるような状態ではない。

「あははははは、安心してください。私は今のところは貴女方を殺すつもりはありませんよ。今のところはですが」

アルトは何やら意味深な言葉を言い、後ろへと後退していく。しかし、後ろには何も無い。

「貴女方の可能性を信じてますよ……ああ、ブラドは適当にしていますよ。では――」

「「なっ！」「」

キンジとアリアは驚きの声を上げる。当たり前だ。なぜならアルトは急に後ろへ倒れこむように屋上から落ちたのだ。

此処はランドマークタワーの屋上。つまり最上階だ。普通の人間なら、落下した時点で死は確定しただろう。アリアはキンジの2人は屋上の縁に駆け寄り、下を覗き込んだ。

「な、ななななな……」

「嘘だろ……」

キンジとアリアが下を覗き込んだ時に見えたのはタワーの側面を蹴り、体を反転させ両手を広げながら建物と建物に飛び移るアルトの姿だった。その動きはまさに忍者顔負けだ。

「アクション映画でもそんなことしないぞ……」

「もう何も言わないわ……」

キンジとアリアはもはや呆れている。ブラドを一瞬で倒したり、アクションスターを遥かに超えた動きを見せられたりとアルトの人外ぶりをよく思い知らされた二人であった。

その後、ブラドの身柄は神奈川県警に引き渡され、長野のレベル5拘置所に拘置中となった。

「終わらせたのね。あなたの宿命を」

学園島とレインボーブリッジを挟んだ向かいにある人口浮島。4月にキンジが飛行機をぶつけたせいで折れ曲がり、回ることを忘れて

しまった風力発電機。そのプロペラの1枚に腰掛けている女性――

――カナが言う。

「ええ、本当に。長かったですね……しかし、終わってみると寂しいものです」

カナの目の前にいる神父。アルトが答える。因縁の相手――
――吸血鬼を斃した。ヘルシングの名を持つ者にとっての悲願を成し遂げた。なのに……アルトの顔は晴れてはいなかった。寂しそうに、愁いを帯びた表情をしている。

「これからどうすればよいのでしょうか……」

アルトは目的を達成するには若過ぎた。先代や先々代のヴァン・ヘルシングはほとんどの吸血鬼を一生かけて狩り続けた。

アルトに名を継がせた先代のヴァン・ヘルシングはブラドと戦い続けたが結局、決着はつかなかった。そして、アルトが一〇歳の誕生日。その日に名を継承したとともに先代であり父であった人は亡くなった。いくつで亡くなったかは覚えていない。

全ての吸血鬼殺しがその役目に生涯を捧げたが、アルトはまだ十二歳。正直、このまま何も目的が無いのは辛かった。いつそバチカンにでも所属してみるか？そう考えていると

「役目ならまだあるでしょう？未来を見届けるといふ大事な役目が」

カナが言った。

確かにまだあの子たちの答えを見ていませんね。心の中でそう呟くとカナの視線の先、自分の後ろを見つめた。普通の人に見えるのはレインボーブリッジと学園島。だが、アルトはそんなものを見ていたのではなかった。

「キンジくんが来ましたね。それでは私は失礼しますよ。兄弟水入らずのほうがよいでしょう?。」

「ええ、ごめんなさい」

「謝られる筋合いはないですよ」

アルトはそう言い残し、黄昏時の東京の街の方角へと歩き出した。

—— さて、貴方達の可能性を見せてもらいますよ。神埼・
H・アリア、そして、遠山キンジ ——

六の傷 目的の終わりと役目の始まり（後書き）

三巻終了です。今回は短かった……次回から四巻突入です。どこでレキにフラグを立てるか……意見があったらください。

七の傷 絶えない疑問と嫌な予感

トゥルルルルル、トゥルルルルルル、ピツ。

『もしもし、アルトか？どうしたんだ？』

少しの呼び出し音の後、ジャンヌが電話に出る。今回はアルトからジャンヌに連絡を取った。この前あったことや、彼女の様子の確認のためだ。

「まずは近況報告です。単刀直入ですいませんが、貴女の周囲で変わったことはありませんか？」

『変わったこと？……あゝ、その……だな』

ジャンヌが電話越しに何か言いにくそうな様子になる。絶対に何かなければこんな様子にはならないだろう。

必死に誤魔化そうとしているようだが、全く誤魔化せていない。人の心が読めるアルトの前で誤魔化そうとしても無駄だが……

「何かあったのですね。話してはくれませんか？別に心配こそしますが、馬鹿にしたりはしませんよ」

『本当か！？お前は私が何を言っても馬鹿な女だとか、可笑しい女だとは思わないか？』

「え、ええ。別にそんなこと思いませんよ」

凄じ剣幕で言うジャンヌに少々驚きながらもアルトは普段通りに答える。

さっきの声が少し耳に響いたようで、軽い耳鳴りがするが気には留めない。

「それで、何があつたのですか？」

『……………足を折った』

「……………は？」

まさかの告白に言葉を失い、やっと出た一言だった。

「え、ちょっと待ってください。そんなことになってしまった経緯は？」

『…………虫だ』

「虫…………ですか？」

『ああ。道を歩いていたら、コガネムシのような虫が膝に張り付いたのだ』

「…………ええ」

『私は驚いてな。そのせいで、道の側溝にはまってしまった』

「……………」

『そして、ちょうど通りがかったバスにひかれた』

「……………あの」

『全治二週間だ』

マジですか…………全治二週間で済んだことが不幸なのか幸いなのかよ

くわかりませんが、災難でしたね……

「……わかりました。とりあえず、無理はしないようにいしてくださいね。見舞の品はいりますか？」

『べ、別にいい！それより——』

パンッ！

突然の銃声。

それはアルトの右手に握られている漆黒の拳銃——オメガから放たれたものだった。もちろん空砲ではない。銃口が向いている先の下には

「スカラベ……ですか」

エジプトに多く生息するコガネムシのような虫、スカラベ。胴体にぼつかりと穴の空いたその死体があった。仰向けになり胴裏を曝け出している。

「……………」

アルトはその死体を見つめながら考えた。

スカラベは基本的に日本には存在しない。生息できるような環境でもないからだ。なのに何故こんな東京の街の公園などにいる？しかも、私をダイレクトに狙って。

いや、私は知っている。この虫を意のままに操り私を邪魔だと思っている『魔女』を

「パトラ……ですね」

確実にあの『魔女』しかいない。ジャンヌの膝に張り付き事故の原因をつくった虫もパトラの操り人形だろう。

「私を呪い殺すつもりですかね？無駄なことを……」

地面に転がっている穴の空いた虫を侮蔑の眼差しで見る。しかし、スカラベを蔑んでいるわけではない。自ら姿を現さないその主人を蔑んでいるのだ。

「あつ、携帯電話……」

アルトが不意に思い出す。だが、生憎と携帯電話の電源を知らず知らずのうちに切ってしまったらしく、画面には黒しか写っていないか

った。

アルトは申し訳なさそうな顔をしながら、心の中でジャンヌに謝罪し、行く当てもなく歩き出した。

アルトが去った後、残った虫の死骸はなく。白い灰だけが残り、やがて風に飛ばされた。

「……なんで……私が……」

あの日から数日の夜。アルトはなぜか上野にある緋川神社に来ていた。
——ジャンヌと共に。

「つべこべ言うな。お前が勝手に電話を切るから悪い。だから私と祭りを楽しめ、ということだ」

「いやいやいやいや、意味がわかりませんって」

今日はここで七夕祭りが催されている。別に行くつもりはなかったが、いきなり現れたジャンヌに強制連行された。

その時のジャンヌは何故か、有無を言わせない迫力があつた。それに負けたことで見事こんな人ゴミヘGo toすることになったしまったということだ。

「……まあ、いいでしょう。電話を切ったのは事実ですし。しかし

」

右横を見る。そこにはアルトの右腕に自分の腕をからめているジャンヌがいた。うつむいているので分からないが顔は少し赤くなっている。

「なぜ貴女は私の腕につかまっているのですか？少々歩きづらいでしょう？」

「う、うるさい！片足が不自由なのだ。はぐれては困るだろう！」

「り、了解しました……」

わけがわからない……。片足が不自由でつかまっているのは納得できたが、何故顔を赤くしているのやら……女性と言うのは不思議ですね……

「む？あれは……」

どんどん流れていく人ごみの中でジャンヌは何か見つけたようで、前をじっと見ている。アルトもジャンヌの視線を辿るように前を見る。……なるほど

「遠山キンジと神崎・H・アリアですね。御2人ともデートですかね？」

「ででででで、デートだと！そんな、私とお前はまだそんな仲じゃ……」

デートの単語を聞いた瞬間にジャン又はあたふたとして悶え始めた。
……正直、腕を振り回されているので痛いのですが……聞こえない
でしょうね……

アルトは自分の腕をぶんぶんと振りながら未だに悶えているジャン
又をなるべく無視し、キンジとアリアを観察し始めた。

「ん……？ 屋台で止まりましたか。あれは……綿……飴？」

アリアが止まった屋台に書いてある文字を読んできると、確かに「
綿飴」と書いてあった。飴^{あめ}というのはあの飴ですよね？ それにして
も……

アルトは屋台のおじさんがくるくると割り箸に綿状になった飴を
絡ませている様子をじつくりと見ていた。もはや、周りが見えない
ほど……

「お兄さん。そんなに珍しいのかい？」

「え？」

「穴が空くほどこっち見てたからさ。お兄さん外国人だろう？ そんなにこれが珍しいのかい？」

少しの硬直の後、理解した。集中のしすぎで周囲が全く見えていなかった。買わずにただこちらをみているだけでは、さすがに失礼だろう。

アルトは綿飴を買おうと屋台ののれんをくぐった。

「ジャンヌ。食べますか？」

「……だから、まだ……どうしてもというなら、仕方ないが……」

「うりゃ」

未だにあちらの世界にトリップしているジャンヌにピシッ、とデコピンをして強制送還させる。食らったジャンヌはおでこを押さえて「うつうつつ」と唸っている。

「ゴホンっ！すまない。少々、我を忘れていたようだ。で、なんだ？」

「綿飴わたあめですよ。珍しいですし、買っていいことと思うのですが、ジャンヌもいらいますか？」

「お、お前が私にプレゼントだと……ようやくか……」

最初の方は聞こえたが最後の方はブツブツ呟いてる様だったので聞こえなかったが、一応いるということなのだろう。

「じゃあ味は……なっ!？」

アルトは味を選ぶために、綿飴を作っているところの前を見る。そこには、はっきりと――ももまん味と書かれていた。

何故に綿飴でももまん味!？どう考えてもおかしいでしょう?ここは妥当なものを……

「む?アルト、ももまん味というものがあるではないか。すまないが、これをふたつ頂こう」

「はいよおー」

ジャンヌはいつの間にかアルトの財布を手元に持っていた。その中から代金を出しももまん味(!?)の綿飴と交換する。

ももまん味も突っ込みどころ満載ですが、貴女も突っ込みどころ満載ですよ……

「ほら、アルトの分だ。それにしても本当に変わっているなこれは」

「あははは、そうですね……見た目もそうですが、味も変わっていますね」

ジャンヌから一本の割り箸に巻き付いた綿飴と財布を受け取ると、苦笑いをしながら綿飴に口を付ける。不思議な触感が口に広がり、溶ける。欧州の人間はほとんど感じたことのない摩訶不思議なものだった。

「ところで、アルト」

「ん、なんですか？」

「ホームズと遠山はもういないぞ」

「あ、」

ジャンヌに言われて気がついたが、さっきまで目で追っていたふたりが全く見えなくなっていた。おそらく綿飴職人に集中していた時にはもういなくなっていたのだろう。

「……まあ、いいでしょう。この後の二人は任務ですか？」

「ああ、遠山の単位が足りていないらしく、夏休み中にカジノの警備だそうだ」

カジノか……客かディーラーに紛れて潜入してみるか？それにしても、金一から一切連絡が無いのが気になりますね……。

「もしかして、潜入するつもりか？」

アルトの考えを察したジャンヌが言う。腕は……未だに絡まったままだが。

「……いや、今回はやめておきましょう。お祭り気分な日に危険なことはしたくありませんしね」

もちろん嘘だ。もしも潜入するなんて言ったら、ジャンヌが付いてくるのは、ほぼ確実だろう。今回は妙にイヤな感じがする。しかも、片足が使えない状態で巻き込むわけにはいかない。

「そうか……ならいい。そういえば、アルト」

「？今度は何ですか」

ホッ、とした様子のジャンヌがいきなり真面目な様子になり、こちらを上目使いで見る。身長が結構違うのでどうしてもこんな風になってしまう。

「レキがお前のことを探していたのだが……」

「……」

やはり、あの日に姿を現したのが原因か……流石に軽率過ぎたかもしれないね。一度死んだ人間が目の前に現れるなんて普通は信じられることではないし……警戒を強めておきますか。

「……排除するか？」

「えっ？」

いきなり低い声になったジャンヌにアルトは声を上げて驚いた。戦いのときでもこんなに恐ろしい声は出さない。今のジャンヌには恐怖のようなものを感じた。

「レキとお前がどんな関係かは知らない。だが、アイツがお前に害をなすというのなら……」

「そこまでですよ。それ以上先は言わないでください。貴女はもう『魔女』ではなく『武偵』です。そんなことを口にしてはいけません」

「だがっ！」

反論しようとするジャンヌの口を人差し指で押さえながら制する。傍^{はた}から見たら凄くキザっぽい行動だが、アルトにそんなつもりはない。

「レキのことはこちらで何とかしておきます。だから、貴女は今を楽しんでください」

「……………」

ジャンヌは納得できないような表情をするが、こればかりは仕方がない。納得できなくても、納得させるしかないのだ。

「……………わかった。なら、今夜を楽しみましょう」

「それがいいですよ」

その後、さまざまな物を全てアルトの財布から支払われたが、祭りから帰るときに自らの財布が妙に軽くなっていたことには気付かなかった。

七の傷 絶えない疑問と嫌な予感（後書き）

二日ぶりの更新……待たせていたらすいません。

八の傷 『私』 『俺』 — 『僕』

祭りの日から数日の夜。

アルトはいつも東京の街から外れた路地裏に来る。もしも『彼』が出てきても被害が出ないようにするためだ。基本的に無益な殺生はしないが、『彼』の逆鱗オモチャに触れると確実に命が消えるか、惨たらしい方法で『彼』の玩具オモチャにされる。それだけは避けなければいけない。

「ふう……」

息を吐きながら壁に寄り掛かるように地面に座り込む。体内の血がボコボコと沸騰しているように熱い。『彼』の力が夜の影響で強まっている証拠だ。路地裏の建物と建物のかすかな間から見える月。今日は大幅に欠けている。

「……全く、月を見ると狼男に変身するなんて、誰が言い始めたのでしょうね」

ふっ、と笑い。指を銃の形にして月に向け、「ぱあん」と、撃つ仕草をする。

特に意味はない。

がたんっ

「ん？」

右横から物が倒れる音がした。

こんな路地裏に誰が……？疑問に思って横を向く。しかし、そこにいたのは人間ではなかった。

銀の毛並みをした巨体の

——狼だった。

「こんにちわ。久しぶりですね」

挨拶をすると銀狼は律儀にガウ、と一返事をする。久しぶりと言ったのは一か月ほど前にこの路地裏で会った、その当時ブラドの手下だった狼だったからだ。しかし、あの時のような強烈な殺気を微塵も放っていない

「今日は何の用ですか？」

そう問うと、銀狼は背を向ける。その後、首だけをこちらへと向けてじっとこちらを見ている。どうやら様子を窺っているようで、全く動こうとしない。

「ついて来いということですか？」

アルトの問いに狼は一度頷き、歩き出す。おそらく誰かの呼び出しだろう。畏の可能性もある。しかし、殺気を放っていないことからその可能性は低いだろう。

「よっこらせ」と腰を上げ狼に続く。

暗い路地裏。夜なこともあって、人間の眼にはほとんど何も映らない。だが、狼とその後続くアルトには鮮明と言うほどではないが、道に落ちている物や周囲の様子は見えていた。

そして、狼の歩みが止まる。狼の前には小さな人影。狼はその人影に寄り添い、頭を撫でてもらっている。

小さな人影の正体はアルトの見覚えのある人物だった。一度別れ、そして、つい最近再開した人物――

「レキ……」

「はい、久しぶりです。アルトリウスさん」

私を此処に呼び出した人物――レキは相変わらず感情のこもっていない声で言う。暗くてどんな表情をしているのかわからない。だが、おそらくいつも通りの無表情なのだろう。

「その狼は貴女が飼い慣らしたのですね」

「はい。ハイマキという名前です」

狼もといハイマキは返事をするように小さく吠える。

この狼が前会った時よりも丸くなったように見えたのはどうやらレキのおかげらしい。なぜ狼を飼おうと思ったのかは知らないが……。

「それで？私をわざわざこんな人目に付かない暗闇に呼び出した理由は何ですか？」

アルトは本題に入った。

本当のところ、予想は付いている。だが、本人の口から聞かなければならない。ただの好奇心なら答えることはできないからだ。この世界の裏に関わる覚悟が無ければ教えることはできない。

レキの無表情から感情を読み取ることはほぼ不可能に近い。だからこそ言葉が必要なのだ。

黙って相手の言葉を待つ。だが、

「……………なぜですか……………」

「は……………？」

しばらく経って出できた言葉は、質問ではなく『疑問』だった。

アルトはわけがわからず間の抜けた声が出てしまう。それほど予想

外だった。しかも、レキの声は微かに震えていた。

「あなたは……本当に『あの』アルトリウスさんなのですか？」

「……………」

こちらがわけがわからなくなってきた。『あの』アルトリウス？何を言っているのだ？私は私。あの日、レキの前から姿を消した日からかなりの年月が経ったが、本質はほとんど変わっていない……はず……。

「何を言っているのですか？私はアルトリウスです。今も昔も。『あの』なんてものも私です」

「……では、なぜ、『私』なのですか？」

「『私』……？」

さらに疑問が募る。なぜだか、頭もズキズキと痛くなってくる。……何かを掘り起こされるような感覚だ。頭を抱えるアルト。そんな様子を目を離さずに見ていたが、レキは問いかけをやめない。

？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？
？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？
？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？
？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？誰だ？

「アナタハダレダ」

無表情でこちらを見つめるレキから『その』言葉を聞いた瞬間、疑問を残したまま、アルトの意識は完全にブラックアウトした。

八の傷 『私』 『俺』 ————— 『僕』 (後書き)

いつの間にか二週間近く更新してなかった……。カンピオーネばっか更新してまして……。折角の更新でこんな意味深過ぎる内容になつてすいません……。

九の傷 引かれた引き金と違いし兄弟（前書き）

すいませエエエエエエエエエエんツツ！！文事態は大方できたいたのですが、他の更新のせいですっかり忘れてしまいました！クオリティが落ちている可能性大ですが、読んでいただけたら幸いです。

九の傷 引かれた引き金と違いし兄弟

白。

白、白、白、白、白、白、白。

どこまでも続いていく真っ白な地平線。

周囲には何もなくて、ただ脚のつく地面も、見上げる空も、目の前に
広がる空間も限りなく白く――無だった。

「……………ここは……………?」

知らない空間。何年間の時を費やして様々な世界の地を見てきた。
だが、こんな場所は知らない……………はず、なのだ。

辺りをいくら見渡してもあるのは白。つまり無。こんな場所が世界
に存在するはずはない。しかし自分はこの場所にどこか懐かしさを
感じる。

行きつく答えは一つ。

――ここは自らの中だ。

「アナタハダレダ」

ここへ着く少し前。レキが最後に残した言葉だ。今でもはつきりと耳に刻み込まれている。忌々しい様な、忘れ去られたトラウマを掘り起こされるような。……あれは彼女が自分に示した否定を短くもはつきりと顕した言葉だった。

「……誰って、言われましても……ねえ？」

「全くだな。俺様も自分が誰だか知りたいくらいだ」

右へ視線を移すと、そこには髪の色は黒味がかった銀髪。血を顕したような朱の瞳^{あか}。それらの違いはあるが、それはもうひとりの自分だった。いつものように血に飢えている様子はない。替わりに人を馬鹿にしたような挑発の目をしながら、肩をすくめていた。

「……やはりいましたか。私が気絶した原因は？」

「『引き金』^{トリガー}引いたんだよ。あのお姫様。いい加減時期かねエ……」

「トリガー？つまりは引き金ってことですか？」

わざとらしくやれやれと首を振る『彼』に問いかける。

『引き金』^{トリガー}ということは、もちろん何かの引き金だったということだろうが、全く心当たりもなかった。

「さて、次は弾丸が飛び出るのはいつかな？明日、明後日？それとも数時間後？」

「何を……っ!？」

「まあ、いずれにしても近いだろうな。お前と俺はその時にどうなっているかな？」

「だから何を……」

「『王』にして騎士の血筋は途絶えたと思われたが、その大いなる血は然るべき器へと受け継がれた――

「ア・ン・ブ・ロ・シ・ウ・ス・ッ……！」

初めて、初めてだ。『彼』の名前を呼んだのは。人の話を全く効かない彼に対して、怒りのあまりに呼んでしまった。

理由は不明だが『彼』は自らの名前を呼ばれることをこの上なく嫌う。だから『彼』の名は呼ばない。それが『アルトリウス自分』と『ア・ン・ブ・ロ・シ・ウ・ス彼』。ふたりの暗黙の了解だった。

「……………人の名前」

そのルールが破られた今。『彼』は怒りと共に

「気安く呼んでんじゃねエよッッ!」

吸血鬼、妖怪、悪魔、それらを
も超越し、恐れ平伏させた最強の獣と化した。

「キンジ。お前は たった1人の兄に、逆らうつもりか」

沈没しかけた砂の船上。「太陽の船」と呼ばれたこの船の上で、世界でたった二人の血の繋がった兄弟は互いに敵意をむき出しにして相対していた。

「もう、あんたなんか兄さんじゃない……！」

変ってしまった、何もかも。そんな兄に明確な拒絶の意志を示す弟

——遠山キンジ。

「……………」

そんな弟に対し、何も言わずに言葉を聞き続ける兄

——遠山金一。

「昔の俺が憧れていた　どこまでも正しい人間だった俺の兄さんは、あの冬、この海に沈没したアンベリール号で死んだんだ。今のあんたは、優しかった俺の兄さんじゃない。正義だの可能性だのなんか、もう関係ない――俺は――」

キンジは、腰のホルスターを開け、ベレッタを抜く。

その人を殺すための道具で、何もかも断ち切るかのように。

「兄さん……いや、元・武偵庁特命武偵、遠山金一！俺は、あんたを――殺人未遂罪の容疑で、逮捕する」

銃口をその胸に向けられた金一は、静かに目を閉じた。

「――いいだろう。俺もまだ一つ、確かめていないものがある。お前のHSS……」

「それは、アリアでなったものだな」

「それが何だってんだ……！」

「――見せてみる」

そう言つと金一は、吹き流れる砂の中で僅かに爪先を動かした。

「この船が沈むまで 残り、15秒といったところか。その15秒で、俺はもう一度だけ、お前を試す。お前の想いが本物かどうか、確かめる。今一度、その眼をしたお前と、あの『緋弾』との絆に賭ける――」

金一は銃を抜かない。

何の構えも取らない。

――否。構えた。僅かに爪先を動かして。

実の弟に対して。

銃を見せない、無形の構えは――『不可視の銃弾』
インヴィジブル

――パン！

いかなる犯罪者も仕留めた必殺の銃撃が放たれる。
——だが、キンジは

「——！」

避けなかった。もちろん弾丸は防弾服、胸の中央へと命中する。
全身の血が暴れ、呼吸が止まり、意識が失われる。死の感覚をキンジは体験した。

「なぜ避けなかった」

「わざと……喰らったんだ。それぐらい分かれ」

なんとか踏みとどまったキンジは精一杯の強がりとして口元を笑わせる。

「……視えたぞ、『不可視の銃弾』——！」

世界はキレイ事では片付かない。誰もそんなことはわかってる。けど、それでも、守りたい存在がいたならば

九の傷 引かれた引き金と違いし兄弟（後書き）

アルトリウスとアンブロシウス。分かる人なら分かるかもしれないね。……それにしても一か月も更新しなかって……本当にすみません。次はなるべく早めに更新したいと思います。感想、評価、ご意見など頂けたら行幸です。

十の傷 闘争の狼王

ズガン、ズガアンツ！！

『彼』が右手に持つリボルバーから大口径の弾丸が二発連続で放たれる。トラス社のレイジングブルを基礎としたその改造銃から放たれたのは454カスール弾。

弾丸の威力は現在世界最高の威力を誇る500S & Wマグナム弾にこそ劣るものの、それ以前は最強の弾丸として知られていた弾丸なのだ。

しかし、その威力が故に反動も恐ろしくキツイ。普通の人間なら一発撃っただけでのけ反ってしまう。だが『彼』は反動なんて意に返さず、二発連続で弾丸を放った。もちろん『彼』が人狼としての恐るべき筋力を有するがゆえにできる真似だ。普通ではない。

「……………」

対してアルトは神父服の袖へと手をつ込み、無言で抜刀する。

シュ———ジャギイイイイ
イイイイイインツッ！！

鋭い刃が抜き放たれ、銀に煌めく光が『彼』の眼に映った瞬間――
――二発の弾丸は中心から真つ二つに斬り裂かれ、白い地面にその残骸を残した。

「ハッ！」

そんなことわかってるんだよ。いかにもそんなことを言いそうな『彼』は口と眼を釣り上げて短く笑う。そして空いている左手でポケットに手を入れる。一瞬の動作だった。

インサイジレ
「不可視の銃撃」

次に起こりうる攻撃に反応し、両足の筋肉を最大限に使用してアルトは横へ跳ぶ。

パァンッ！

予想通りに不可視の弾丸はアルトのいた白い地を焦がした。

「不可視の銃撃」。インワイジビレそれはアルトと長年パートナーとして行動を共にしてきた相棒、遠山金一が得意とする技。

金一は最も早撃ちクイックドロウに適した銃、コルト・シングルアクション・アーミー。通称「ピースメーカー」を使用してこの技を行う。が、『彼』は違う。

スタームルガー・ブラックホーク。それが先ほど不可視の弾丸を放った銃の名称だ。

基本的には金一の使うコルトSAAを原型としたシングルアクションリボルバーであるため外観はSAAによく似ている。が、強力なマグナム弾を装填・発射するために、各部の耐久力を向上させた設計がなされている。

加えて、精密な照準器を採用しシングルアクションリボルバーとしては珍しい安全機構を取り入れるなど、実践射撃に適するようにするための配慮が随所に見られる。

失礼な話だが、高価だが観賞用に多くはなってしまうコルトSAAシングルアクション・アーミーと比べ、使いやすさや耐久力の高さからブラックホークの方がより実践的ともいえる。

——
パアンツ！

「っ、ちい！」

的確な射撃をギリギリのところでは避ける行動が連続する。もちろん大分マグレだ。いくつかの弾丸は体を掠めている。

「不可視の銃撃」は自分でもできる技ではあるが、金一や「彼」とは精密さが天と地の差ほどある。要するにただでできるだけなのだ。

「オイオイ、逃げてばかりじゃなくて反撃してこいよ。つまんねえだろうがアツ！！」

怒りだが、退屈なのだからよくわからないが、「彼」は咆哮しながら銃撃を続ける。

全くもって無茶を言う。

見えないの銃撃を連続して放つ「彼」に対しては今のところ避けるしか術がない。ブラド戦で使った「不可視の銃撃」インヴィジブル。アレを使えば斬れるかもしれない。だが、リスクが大きすぎる。

「不可視の銃撃」インヴィジブルとは所謂、居合斬りと似たような技なのだ。超高速で刃を袖から抜刀し、物体を斬る。もちろん人に使えば一撃必殺だが弾丸を切り裂くのには全く適していない。隙が出来てしまうからだ。物体を切り裂いた後、わずかな間筋肉が硬直する。本当にわずかだが、「彼」はそのわずかな隙を見逃すはずがない。よって却下。

対抗手段はひとつ——ブラックホークの弾切れだ。その瞬間に一気に接近戦に持ち込む。それなら勝機はある！

——
パンッ！

——
ズガンッ！

「——
なっ！？」

撃ってきた。それも二丁で。ブラックホークから放たれる不可視の弾丸と、改造リボルバーから放たれる超高威力の弾丸。一瞬のうちに二発の弾丸が迫っていた。
速さの遅い高威力の弾丸はギリギリのところまで抜刀。斬り裂くことはできなかったが軌道は反らせた。だが、音速を超える不可視の弾丸は右肩へと直撃。肉を貫き、骨を砕いて、貫通した。

「……ッ」

火傷をした時のような痛みが肩に走る。出血はそこまで酷くはないし、もちろん致命傷ではない。だが胴と腕を繋ぐ骨をやられたらし

く、右腕はだらんと下がっていた。今は使い物にはならないだろう。

「はぁ……さすが、強いですね……」

ため息混じりな声で言う。『彼』は好機だというのに時に攻撃もせずじつ、とこちらを見ていた。その表情から読み取れるものはわからない。

ただ、感じたのは自分を値踏みしているような視線。

「……この程度か……？ いや……違うだろ。まあ、いい丁度弾切れだ」

ポツリポツリと『彼』はつぶやく。そしてあるうことが、右手で保持していたリボルバーを放り投げた。

「……………」

無言でポケットに手を突っ込み、次は不可視の弾丸を放ち続けた。ブラックホークを投げ捨てる。次は今回の戦闘では使用していなかったインフィニティとオメガ。次々に『彼』は自らの武器を放り、ついには丸腰になった。

「こっちの方が得意だろ？ 近接戦闘。お前の専売特許」

『彼』はそう告げると地に足を踏みしめ、狼のように鋭敏な爪を生やした腕をこちらへ向け構える。どの格闘術でも見たことのない構え。それはそうだ。『彼』は我流の格闘術しか使わない。だが、その構えは堂に入っている構えだった。

「貴方こそ銃器による攻撃よりも近接戦闘の方が強いでしょうに……」

全くハンデになってない。

右肩の痛みに耐えながら、生きている左腕で自らの得物、マチエツトを二本。人差し指と中指、中指と薬指で挟みこむようにして構える。

「それでは――」

「ああ……………」

「勝負!!」

ダッ、とふたりは同時に地を蹴る。速さでは『彼』の方が圧倒的に上。ならば――

「――!!」

先に仕掛けたのはアルト。猛禽の爪のように構えた二振りの刃を振り下ろす。速度はもはや神速。常人には絶対に見えない。だが――

――!!

ガキイイイイイツツ!!

「さすが、刃物の扱いはお手の物ってかア!？」

『彼』は爪で刃を弾き、その鋭利な爪牙でアルトを貫こうと腕を突き出す。

その行動をアルトは読んでいたように、突き出された腕を掴む。そして短く跳躍。『彼』の顔面に向けて強烈な横蹴りを放った。

今のアルトでも筋力と身体能力は常人のはるか上に位置する。例えば、相手が身体の固い人狼でも顔面の筋肉はそこまで厚くない。この蹴りを喰らったらどこかしら骨は折れるだろう。

「————チィッ!!」

『彼』もやはり身の危険を悟っていたようで、自分の顔面わずか数ミリのところで手を割り込ませ、アルトの右足を掴んだ。——

——捕らえた。そう『彼』の顔に笑みが浮かぶ。が、次の行動は予想外だった。

掴んでいた腕を離し、逆に掴まれている右足を軸にして、身体を捻る。そして、一回転後頭上九十度からの踵落とし。

「ガッ……………!!」

これは見事にヒット。アルトはそのまま後ろにバック転しながらマチエットを『彼』目掛けて投降した。空を裂きながら弾丸よりも鋭

その咆哮は震動だけでアルトの放った鋭い矢よりも早く、鋭い閃光の一撃を得物ごと粉々に粉碎した。

「……………そんなのアリですか？」

文字通り木っ端微塵になってしまった武器を見て呆れがちにつぶやく。一本が破壊されてしまった今武器は残り一つしかない。つまり
覚悟を決める。

「……………」

残されたマチェット一本を袖にしまい、目を閉じる。

『インヴィジブル 不可視の一線』を放つ体制だ。

武器が一本しかない今ではこれしか必殺がない。加えて『彼』も武器は爪しかなく、突進するしか方法がない。この一手出勝負は確実に決まる。それはお互いにわかりきっていた。だから――

「……………」

.....

「一手を以て決める！！」

ズガアアアアアアア
ンツツツ！！

砲弾のような轟音を發して『彼』は突進する。地を抉り、空を殴り、一直線にアルトへと向かっていく。

轟音に反応してアルトは柄を持つ手に力を込める。片手での『不可視の一線』。決して成功確率は高くない。だが、やらなくてはいけない！！

シュ

一瞬。空を裂く音と共に鞘から静寂を纏った不可視の刃が抜き放たれた

十の傷 闘争の狼王（後書き）

今回は原作キャラの出番がありません。次は出てくると思います。
感想、評価、ご意見など頂けたら……いや、むしろください！！

十一の傷 決着

「……………」

「……………」

無言の睨み合いが続く。同じ顔を持つふたり。そしてお互い突き出しているのは唯一となった武器を握った左腕と、業物の刀にも負けない凶器と化した右腕。

そして凶器となった『彼』の右腕はアルトの胸を貫通して背中から突き出ていた。一見すると『彼』の完全なる勝利。だが――

「……………ガハッ」

血を吐きだしたのはふたり。無論、アルトと『彼』だ。よって『不可視の一線』は成功したと思われる。が、なぜ刃物で斬られたのに吐血するのか？理由は簡単。アルトは刃で斬ったのではない。

『彼』の右胸のあたりには、先ほどまでアルトが握りしめていたマチエットが突き刺さっていた。これが意味すること、つまり武器を

投降したのだ。一瞬で。
アルトはこう考えた。

『自分の抜刀速度はあちらの突進速度よりも確実に速い。だが、胴体を半分に割るか、両腕を一瞬で斬り落とすしか、勝機はない』

と。
――胴体を半分に分割する。

それはいくらアルトでも無理な話だった。

普通の人なら可能かもしれない。しかし相手は人狼。筋肉の強度が半端ではないだろうし、相手も自分の胴体を狙うのが普通だとわかっている。だからこれは却下。

次に両腕を斬り落とす。これも一瞬で却下。攻撃のときに突き出しているのは片手だけで、持て余しているもう片方は斬ることなど不可能。斬れても片方なのだ。そして片方斬っても、もう片方が襲いかかる。

そこで考えたのが、「鞘に収めた状態から武器を投降」という技。

『インヴァジブル不可視の一線』の抜刀速度を利用し、抜刀とほぼ同時に武器を投降。成功すれば回避不可能の神速の一撃を相手に喰らわせることが出来る。ただ、成功すればだが。

抜刀と同時に投降なんて荒技は常識的に考えて絶対にできない。いや、できたとしても射線がズレて当たる可能性は皆無。できるはずがないのだ。しかし、アルトはそれをやってみせた。それも心臓の位置を丁度狙って。ただ、成功はかなりのマグレ。それは十分にわかってる。二度は使えないだろう。

「……………つたく、痛エなア。初めて『死ぬ』って感覚を味わった気がするぜ」

アルトの胸に刺さっている手と自らの胸に刺さっている凶器を未だに抜かず、『彼』は自分の傷なんて大したことが無いように言い放った。

やはり無理があつたか…………。

予想はしていた。いくら心臓を突き刺してもそんなものでは『彼は死なない。死ねない。』

技が最高でも武器が凡庸な紙切れと同然だったら、意味を為さない。決して武器は紙切れではないが、『彼』の前では殆どの武器がそれだった。

「…………敗者は私ですか…………。では、どうぞお好きに」

『彼』はきつと、自分の名を呼ばれた怒りと共にこの身体を支配しようと思つたのだろう。元々三人が共有していた身体だ。ひとりに委ねる時かもしれない。…………待て、何故三人？自分と『彼』、あとひとりは…………？

「そうか？そんなじゃ、いつするわ」

ズボツツ！！

「ッッ……」

『彼』は軽薄そうに言うと、アルトの胸から刺していた右腕を勢よく抜きとった！

血が無くなる。目の前が曇る。身体が熱を失っていく。

——ああ、これが『死』か……

——自己の消滅。それを悟った時、白い闇に包まれつつある視界が『彼』を捉えた。

「王サマ、アンタはまだ死なねエよ。ただ、俺の『力』の一部を還した。……まあ、アンタが本来の力を取り戻したら……そのときにまた勝負しようや。今回は引き分けだ」

——つーことで俺サマはしばらく表、出らんねエわ。悪イな」

何を言っている……？『彼』は一体何を言っているのだ？微かな音すらも聴こえない。そんな無の時間と共にアルトは白き世界から消え去った。

「……………戻ったか」

相対する相手のいなくなった空間で『彼』
——アンブロシウスはつぶやいた。

「ああっ？……別に今更名前の事なんかでイラついたりしてねエよ。
そろそろ頃合いだと思ったんだよ。文句あるか？」

誰もいない。何もない。だが『彼』は人がいるように空へと語りかける。口調こそいつも道理、乱暴だがそこにはほとんど誰にでも向けられてる敵意が無い。今までの様子から長年連れ添った友人と会話をしているようだと思っただろう。『彼』の表情も柔らかなものだった。

「オマエはアイツを見守ってりゃいいんだ。『鍵』は託してある。オマエもその内にお姫様にも会えるだろうよ。だから――」

そこから先。『彼』が何をつぶやいたのかを知る者は無く、知る術もない。

「ん？」

自己が消滅する感覚。それを感じ取れなくなった瞬間、不意に視界が開けた。写るのは灰色の天井と――

――銀髪の美少女？

「目が覚めたか。良かった……全く、心配をかけさせる」

銀髪の美少女――

――ジャンヌ

はほっ、と息をつき、アルトを上から見下ろしている形でいた。

……待て、何故ジャンヌがいる？ついでにここはどこだ？

「……状況説明」

「？ レキがあゝの路地裏にアルトがいると言っていたのだ。だから私はそこに行ったら、見事。路地裏に捨てられた犬猫のように泥まみれで寝転んでいたアルトがいた。とりあえず放置するわけにもいかないから、ここまで運んできた。ついでに私の部屋だ」

「……微妙に長い説明どうも。って、どうやって運んだのですか！？まさか……」

ジャンヌはおそらくパトラの仕業で片足が使えない状態だ。そんな彼女が大の男を運ぶなんて所業は不可能に等しい。普通の疑問だ。……もしも運べたのなら……筋肉少女だ……。

そんなアルトに彼女は「そんなわけあるか！！」と顔を赤くして怒り気味に言った。

「レキの狼の背中に乗せてきたのだ。………か、か弱い少女の私に運べるわけ無かるうー！！」

「そ、そうですね。………すいません、随分失礼なことを考えていたようです」

「か弱い少女」を強調して言ったジャンヌだったが、鈍感かつ天然のアルトには聞き流されていたようで、少し沈んだ様子になる。もちろんアルトはなぜそんな様子になるのかなんてわからない。頭の上に？マークを浮かべるだけであった。

「ごほんっ！！それはそうと、遠山たちはパトラの元へ向かって行ったぞ」

未だに頬を赤く染めているが、気を取り直すように息をつきながらジャンヌが言った。

「……そうですか、ならば私も行かなくてはなりませんね……ふふっ、『第二の可能性』。見えてきたしたよ」

よっ、と先ほどまで自分が寝ていたベッドから降りる。身体はかなり軽い。なぜか、あの空間での戦いでの疲労や、長時間眠っていたときに起こる虚脱感もない。むしろ、力が増している感じさえする。

「はあっ……まあ、予想はしていたがな。———
———そういえば」

ガサゴソとジャンヌは棚をあさり、奥から何かを引っ張り出す。――

黒く細長い袋だった。

「ほら、持っていけ」

その黒い袋をアルトへと投げて寄こした。別に遠い距離でもないの
でキャッチするのは容易だった。だが、驚いたことは………重い。

「なんですか、これは………？」

「知らん」

知らんて……………オイ。

「知らんが、剣なのは確かだ。私の曾々祖母くらいだったか？どこかの騎士から譲り受けたらしい。それ以来ずっとジャンヌダルクの子孫が受け継いできた」

「……………それは家宝なのでは？」

「かもしれんな。だが、お前に託す。……………もつとも、それを抜けければの話だが」

そう言われて袋の口を捜すが、見当たらない。柄らしきところを握ってみるが、もちろん抜ける様子もない。……………なんだこれは。

「その剣を抜いた人物はいない。扱えたのは前の持ち主だったその騎士だけだったそうだ。デュランダルを渡したいところだったが、星伽に借してしまつてな……………。すまない」

「……………まあ、お守りとして持つておきますよ」

本音を言えば骨董品を預けられたような気分だ。だが、家宝を受け取って「これ、いいですね」というのも失礼だ。アルトはその黒い袋をスルスルと神父服の袖へとすっぽり収納した。その様子をジャンヌが驚愕の表情で見ている。

「四。元ポケ。トか？お前の服は……………」

「企業秘密です」

ジャンヌに軽くウィンクしながらアルトはドアへと向かい、ノブに手をかける。そして――

「――あ、もしも生きて帰ってこれたらメイド服着て見せてください」

「……………は？」

「では――！」

妙に清々しい声と共にぱたんと扉が閉まり、部屋には茫然とした様子のジャンヌのみが残された。その目はぼけーっと虚ろな色をしていた。だが、先ほどの言葉を思い出したのか、急に両手を頬に当て、赤らんでいるそこを隠す仕草をする。

「ば、ばばばばばバレていただとおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおっ！！」

ひとりの少女の叫びが部屋にこだました。

「どどど、どうしたんですか、ジャンヌさん!？」

と、アルトが居たため外に出ていた中空知が狼狽してドアをぱたんと勢いよく開けたのは言うまでもない。

十一の傷 決着（後書き）

最後に出てきた黒い袋（？）は実は………だったりします。そろそろアルトや『彼』、そしてもうひとりについても正体がわかってくると思います。感想、評価、ご意見など頂けたら行幸です。

十二の傷 不可視の処刑人

「はっ……………はっ……………」

走る。ただひたすらに、走る。

武偵高校を出たアルトは夜の人工島の街中を全力で疾走していた。目指しているのは海岸付近。

（と、言っても都合よくモーターボートなんてあるのか……………？）

当然の疑問。だが、今は走るしかない。たとえ「ヒステリアモード」になった遠山 キンジや魔術レベルG17の星伽 白雪が共闘しても推定G25の「砂礫の魔女」——パトラに勝てる確率は皆無。神崎・H・アリアはもちろんのことだが、遠山 キンジもこんなところで死なせるわけにはいかないのだ。

そんなことを考えながら走っていると、いつの間にか目の前には波打つ黒い海が広がっていた。使えそうなボートは……………無い。並んでいるボートは白い手漕ぎ式のもの。こんなものでは到底間に合わない……………なんだアレ？

並んでいるボートの最端にそれはあった。周囲の白ボートと明らかに違う異彩をはなったカラー。夜の闇でわかりずらかったが、そ

れは確かに深紅で染め上げられたモーターボートだった。

「……なんか明らかに私に使えっていう意志が込められているような……そして微かな悪意を感じるのは気のせいだろうか……ん？」

近づいてよく見るとボートの側面に白い文字で何かが書かれていた。眼を凝らしてよく見てみると――

「
アルト L・O・V・E はあと by カ・ナ」
」

「……………金——イイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイッッ！！！」

夜の海に向かってアルトは何回か叫んだ後、かなり嫌そうな顔を
して相棒^{カナ}の愛情がこれでもか！というくらい詰まったボートに乗り
込んで、逃げるように出港した。

パトラの放った無数のナイフが散弾銃のように白雪めがけて飛ぶかかる。

「星伽候天流………風条撥止！」
ほとぎそつてんりゅう フウジヨウハッシ

右手に「色金殺女」、左手に「聖剣デュランダル」を構えた白雪は——その眼を見開いたかと思うと、姿勢を低く屈め——パトラめがけて、頭を向けて駆け込む。

そして全身を捻りながら、ぎん！ぎぎぎんっ！と黄金のナイフを左右の刀剣で弾き飛ばしつつ敵に迫った。
まるで竜巻のように振り回すその2つの刃が、パトラに到達する直前。

ぱっ！まるで牡丹の花が咲くように、真っ赤な炎の渦を纏った。

「緋弦毘・双琥！」
ヒノカガヒ ソウコ

ミキサーのように回転しながら振るわれた、炎の刃は――

ぎん！ぎぎん！

瞬時にパトラが足元の砂金から作り出した、フリスビーみたいな黄金の丸盾に防がれる。同時に、しゃあっー！と音を立てる砂金のシャワーが白雪の刀を撫で、刀身から上がる炎の火力が、一気に弱まった。野火を消すのに砂を使うように、火は、砂に弱いのだ。

「――ッ！」

くっ！と白雪が再び柄を握る手に力を込めたかと思うと、炎は復活するが――白雪の呼吸が、早くも乱れ初めている。

白雪は強力な鬼道術を使う際には、かなりの体力を消耗する。今までのような猛攻も、長くは持たない。

一方、相対しているパトラは余裕の笑みを浮かべている。ピラミッドの内部ではパトラの魔力が尽きることはない。まさに無限。

よって白雪の体力が尽きた瞬間――その命は散る。

（ぐずぐずしてはいられない。早く、アリアを取り戻さないと……！）

チャンスを窺うキンジは、ジリ、と砂金の足元を踏みしめた。

「ヒノカグツチ 緋火虞鎚・焰二重！ボムラフタエ」

叫んだ白雪がパトラの額めがけて上段から斬り下ろした、2つの刀が――ささっ！と集まって何重にも重なった黄金の丸盾を、瓦割りのように2枚断ち割って、

「ほっ。アメンホテブの旻盾そらたてを2枚も割りおった」

と笑うパトラの頭上に浮く3枚目に止められた時。
キンジは、ダッ！と 駆け出した。向かうのはアリアの黄金柩。だが――

ばち……ばちばち……！

（……………！？）

キンジは自分の装備に、砂金の粒が当たる音を感じ取った。そして気がついた時には、彼の体にまわりつくように、風が渦巻き、砂金の嵐でキンジを飲み込んだ。

「トオヤマキンジ。妾^{わらわ}はいま、この女を愉しんでおるところぢや。目障りな動きをするでない。風に巻かれて、おとなしくしておれ」

彼に背を向けたままのパトラが言う。

砂金の嵐から放たれる高速の砂金が、キンジの顔面や指に細かい傷をつけ始め、がす。ばちっ！と大粒の金が頬に当たって、血を飛び散らせた。

（身動きが……取れない！体が浮き上がりそうだ……！）

「キンちゃん！走って！」

叫んだ白雪が――1 剣一刀を巫女装

束の帯に差したかと思うと、ばらんっ。

白小袖の申から、二枚の大きな扇を出した。

「星伽巫扇^{ホトギフセン}

――風神駁^{フウジンバク}！」

ちよつとした立て看板みたいに大きく広げた白扇を、白雪は白分が少し背後に吹っ飛ぶ程の勢いで振るった。
わああっ！ 白雪が作り出した突風が、砂金の竜巻を見事に消し去る。

少し浮き上がってしまったっていたキンジの足が地面につき、キンジは再び駆け出した。

「キンちゃん、走って！ アリアの所までー！」

「下郎！ 柩に触れるでないッ！」

パトラが金切り声を上げると――ず、ずずず……

アリアの黄金柩を足元に置いていた、巨大な黄金のスフィンクスが動き始めた。

（こ、こいつ……動くのか！）

堂々と目の前に座っていたから、キンジは逆に油断させられた。

これが――パトラの、隠し玉の大型ゴレムなのだ。

エジプトのお経のようなものをブツブツと眩きながら立ち上がるスフィンクスの体長は、10mは優にある。

（こんな化け物、ベレッタとナイフじゃどうしようもないぞ！）

「それが動くのは分かってたよ……！」

白雪は再び抜いた1剣1刀を、翼のように大きく広げて構えた。そして正面からは刀剣が見えなくなるほど、背後に大きく振りかぶる。

「だから最後の1撃は——その西洋^{スフィンクス}狢犬のために、とっておいたんだよ！」

ぱっつん前髪の下で眉を吊り上げ、目を閉じて力を込めた白雪は――

「星伽候天流、奥義——^{ヒヒホトギガミ}緋火星伽神・^{フタエノナガレホシ}双重流星……！！」

十文字にクロスさせるように、渾身の力を込めて、両方の刃を前方に振るった！

刀剣から放たれた深紅の光が、キンジの頭上を掠めるようにして飛び——X字の刃となって、スフィンクスの首に激突した。

ドガアアアアアンッ……！！

爆炎の渦に飛び込んでいく形になったキンジは、がらがらと音を立てつつ金塊に戻っていくスフィックスの被片を浴びながら突き進む。一歩、あと一歩。時計の時間は――まだあと5分、あった。

「止まらんかあ！ トオヤマキンジ！」

キンジが焦ったようなヒステリックな声に、振り返ると――

「う……………！」

パトラが倒れた白雪を踏みつけている光景が眼に映った。金の砂漠に伏せて苦しいな声を上げている。今のスフィックスを倒した一撃で、とうとう全ての力を使い切ってしまったようだった。

「……………白雪！」

キンジがパトラに拳銃を向けると――しゅう、しゅう……と、水蒸気のようなものが煙が白雪の体から上がり始める。

「飛び道具を捨てて柩から離れるのぢや、遠山。この女をミイラに

するぞ」

「……何……!？」

「人体とは、水袋のようなもの。妾はその水を抜き取る聖秘術ホウミツを持つておるでの。……そうぢや、この術であの憎き狼風情もミイラにしてやるつ……」

にい、と笑うパトラの足元から上がる白雪の水蒸気が、勢いを増していく。

「あ……ああ……」

苦しげな、白雪の声に――

「ま、待てパトラ!」

キンジは拳銃を足元に置いた。置かざるを、えなかった。

「ほほ。大した2人組ぢやったのう、お前たち。スフィックスをも破壊し、柩に迫るとは。しかしそれは所詮、人の技。神より力を授かりし妾には、抗えぬのが道理ツ。立体魔法陣リウムドレイムと共にある妾の力は、

キンジの薄れた視界には、何の異変も起きていない。しかし何か、ピラミッドの斜面を登るような音が近づいていることは微かに分かった。

「――！？」

がしゃああああん！キンジの背後にあったガラスが割れ、そこから、赤く着色されたオルクス潜航艇が室内に侵入してきていた。パトラが驚いて集中力を切らしたせい、キンジと白雪の体から上がっていた煙が止まった。

「無理ねえ……………」

「じゃあ――」

キンジの傍で停止したオルクスのハッチは、既に開いていた。

「もう少し、無理させてもらおうかしら」

「…………同意」

今までの会話を盗み聞きしていたらしいそのふたつの声の主に――
――パトラが、かああ。と怒りなのか何なのか、その白い顔を一気に赤面させた。

「……トオヤマ、キンイチ……！ いや、カナ！それに………ヘルシングッ！」

瞬間。砂金のナイフが、がすがすがすがす！とオルクスの外壁をメツタ刺しにしようと飛んでいく。だが――

スッ

――さああああああああああ。

抜き放たれたのは一本の刃。だが、斬撃は何本もの光の閃光。迸るそれは砂金のナイフを全て斬り裂き、元の砂状へと還した。

「本当。頼もしいわね」

パパパパパパッ！

長い三つ編みを翻し、華麗な月面宙返りを見せたカナの周囲で、6つの光が、ほとんど同時に閃いた。

インヴェジビレ
ファンショット
不可視の銃撃の6連射。

パトラは身を捻り、バック転してそれを躲したが――

ざしゅ。

ネコのような姿勢で金の砂漠に降り立ったその膝に、一滴の血を流していた。初めての負傷だった。

「やれやれ、殺さないで下さいよ？いきなり6連射とか、普通死に
ファンショット
ますからね」

「大丈夫よ。パトラなら躲すことくらい見越していたもの」

すとん。と地面に降り立ったカナを神父服の青年――

―アルトが迎えた。カナはその手にキンジと破壊されたのと同型の拳銃、銀のコルト・ピースメーカーを携えて対なすように、一m弱あるマチエットを構えたアルトと並ぶ。

それを見たパトラの表情は恐怖なのか、よくわからない表情をしていた。

並ぶこのふたり。イ・ウーだけでなく、武偵の世界では知らない人間の方が少ない、この処刑人^{コンピ}たちの刃と銃身は目の前にいる「砂礫の魔女」――パトラに向けられていた。

十二の傷 不可視の処刑人（後書き）

今回はキングジのバトルパートが多いです。次はちゃんとアルトと力
ナに戦闘させます。感想、評価、ご意見などお待ちしています。

十三の傷 歪みと歪み

「出エジプト記34章13——汝還りて彼等の祭壇を崩し、偶像を毀^{こぼ}ち、研倒^{きり}すべし」

聖書の一節を呟き、空中に片手で6発の銃弾をばらまいたカナは——
ジャキンッ！

振りかぶった銃を右から左へ、空中で銃弾にぶつけるように払った。ちやきッ、と元に戻したピースメーカーの回転弾倉には―銃弾が6発とも、きちんと収まっている。

空中リロード。金^{カナ}一曰く、そんな単純な名前の技らしい。だが、ヒステリアモード状態でなければできないこと。ついでに言えば、カナに変身した金一は常時ヒステリアモードなのだ。

「キンジ。私のあげたナイフは、まだ持っているわね？ 緋色の、バタフライ・ナイフを」

振り返って言ったカナに、キンジは頷く。

「——あのナイフを持ったまま、アリアに口づけなさい」

は？そんなとこが言いたげな顔をキンジはしていた。当然、瀕死の者に口づけしろ。なんて言われたら驚くのが普通。だが、生憎とカナは何の説明もなくパトラへと歩いて行ってしまった。

「……あゝ、まあ、好きな女の子と接吻^{キス}する。って、感じの軽い気持ちでいいので……頑張ってください」

「ちょっ、好きな子とのキスが軽い気持ちでいいのかよ！って、もういないし！」

妙な笑顔でキンジに行動を促したアルトはいつの間にか、カナの隣でパトラへと歩いていった。一瞬のことにキンジは、はあ、とため息をつき、目の前を見た。

「パトラ。今の私は――女にも容赦しないわよ」

「ついでに神父もです。今になって魔女狩りをする事になるとは思いませんでした」

「やれやれ、といった感じで天を仰ぐ。だが、そんなアルトをパトラは意にも返さなかった。

「……カナ。トオヤマキンイチ。寄るでない。妾は、お、お前とは

戦いとうない。ヘルシングを置いてここから去るがよい」

「それはできないわよ。なにせ、私と彼はパートナーだもの」

「……………ッ！」

赤面しているパトラの顔が加えて別の意味で赤くなり、奥歯を噛んだような表情をする。そして、自分の周囲に大皿のような6枚の盾を浮き出させた。

明らかに不可視の銃弾の備えだとわかる。ただ、

「45ロング・コルト弾は防げても――」

ズガ、ガガガガッ！ ガガガガガッ！

「500S & amp; W マグナムと454カスールの6連射は防げないみたいですね」
「フアンション」

ふたつずつ穴を空けて砕け散る6枚の盾。計12発の弾丸を放った銃はアルトの両手に存在していた。

それがアルトの両手に握られている白銀と漆黒の大口徑リボルバーに与えられた銘だった。

一つの目、白銀の歪みはブラド戦で『彼』が使用し、その454カスール弾の威力を極限まで向上できるように改造が施された基礎をトーラス社のレイジングブルとする銃身のみオートマチックとなっているリボルバー。

二つ目、漆黒の歪みは今まで抜かれたことのないシロモノ。存在を知っていたのも製作者と相棒^{カナ}だけである。色以外、見た目こそ一つ目の歪みと完全に同じだが、使用されている素材や弾丸は大きく異なる。

フレームは闇を連想させる漆黒。だが、使用されている素材はただの金属ではない。――イエス・キリストや聖人の遺品である、聖遺物が使用されている。

聖釘、イエス・キリストが磔にされた際に手足に打ちつけられた釘であるとキリスト教内で言い伝えられている。現物するものは30

本を下らないだろうと言われており、大変貴重なモノなのだ。

それを溶かし、銃の外部フレームに仕立て上げ、完成した二つ目の歪みは、その存在自体が「聖遺物」なのだ。
オーバードライブ

発射する弾丸は44マグナムのおよそ3倍、454カスールの34%増という強力なパワーを持つ、最強の弾丸、500s&wマグナム。加えて漆黒の歪みという銃型の聖遺物によって清められた弾丸は魔を祓う力を有している。魔女によって造り出された盾など無に等しい。

「こつちもあるわよ」

ぱぱぱぱぱンッ！

自分を隠していたアルトの背を飛び越えてカナが発砲する。パトラはそれをギリギリのタイミングで造り出した盾によって防いだ。しかし、そんなことを予想していたかのように、表情ひとつ変えず、カナは着地と同時に地を蹴ってパトラへと走り出した。

「お、お、お前もその狼男も大ツキライじゃあ

———」！

パトラはおかつぱ頭をぶんぶん振り回した後、周囲の砂金から黄

金の鷹を作り出した。

嘴だけでなく、翼までもが鋭い刃物のように研ぎ澄まされた鷹が、計16羽。

8羽ずつふたつに別れた鷹の軍はそれぞれ、アルトとカナめがけて飛びかかった。

「……………つまらない」

くるくるつと、袖からもう一本マチェットを回転させながら出すと、一歩も動かず、両手に持った刃物を躍らせる。光の壁のように張り巡らされる高速の斬撃による閃光。突撃していった鷹たちは1m弱も手前でその形を砂へと還元され、アルトに触れることすらできるものはなかった。

無傷なのは相棒も同じようで、三つ編みに仕込まれた刃によって襲いかかる鷹を一気に薙ぎ払っていた。

「まだぢゃ！」

次にパトラは黄金の鷹をアルトとカナに20羽ほど飛ばしてきた。何羽かは砂金が足りなかったのか、片足がなかったり、頭が歪だつたりしているが、戦闘能力に問題はないのだろう。

「……………少々厄介、ですね」

静かにそうつぶやくと、両手に持ったマチェットの柄の部分、カシンツ。連結させ、2 mを超す長さをもつ、両刃の武器を作り出した。神父が持つにはあまりにも似合わず、禍々しい曲線の刃が妙に強調された形をしている。

ぶうつうつうつうん、と空気を裂く音を立てながら、それを片手で高速で回転させ、襲いかかる鷹から自らを守り、破壊する攻防一体の盾とする。もちろん向かってくる金の鷹は高速で回転する刃に当たると粉々に碎け散り、破片すらアルトに届かない。

「……？」

アルトがふと横を見ると、髪を解かれた相棒^{カナ}がいた。そして、『仕方ないか』という表情を一瞬し、

じゃき、じゃきじゃきじゃきッ！

髪の中に隠していた、ワイヤーで繋がっていたらしい、いくつもの金属片を一気に組み立てていく。

組み立てられていた金属片は大きな曲刃となり――――さ
らにカナが襟に隠していた三節棍のような金属製の棒も同時に組み合わさっていく。

ぶうつつ、じゃきッ。

風圧で砂金を巻き上げながらカナが完成した武器を構える。それは

「よくやったわパトラ。私にこれを出させたのは、アルト以来よ。
通称、サソリ^{スコルビオ}の尾——砂漠に似合うでしょう?」

まるで西洋の死神が携えるような、大鎌。

その刃は髪の間隙から見つけられないようにするためか、濃紺に着色されている。

見る者全員を圧倒する、その巨大な曲刃に——

「わ、妾は——
お前ら^{ファラオ}ごときに——
霸王^{ファラオ}ぞ! お前ら^{ファラオ}ごときに……——
お前ら^{ファラオ}ごときに!」

戸惑ったパトラは、砂金の鷹、加えて、砂金の豹、アナコンダを——

上から下から、

空中から、めちやくちやにけしかける。

ひゅん、ひゅんひゅんひゅん!

縄跳びの二重跳びより速い速度で、大鎌の軌跡がカナの周囲を趨つた。曲刃は縦横斜め、前後上下もお構いなしで、カナに迫るあらゆる敵を破壊する球状のバリヤーと化す。

「って、こちら集中した方がよさそうですね」

こちらにも鷹やら豹やらアナコンダやらが、接近していることがついたアルトは手に携えた両刃の武器を丸鋸のように再度回転させ、速度をどんどん上げていく。

ばんっ！　ばんっ！　ばんばんっ！　ばばばばんっ！

回転速度が音速を超えた。それをこの炸裂弾のような音が示していた。

先端に触れた空気中の水分が凝結し、円錐水蒸気ヴェイパー・コーンを発生させる。同様のことを大鎌で相棒カナもやっていた。ふたりの周囲から発生するまるで桜の花びらのような形のそれが乱舞し、

ばん！　ばばんっ！　ばすっ！

黄金の敵を衝撃波だけで蹴散らす。武器に触れるまでもなく。

「——この桜吹雪、散らせるものなら……
散らせてみなさい？」

やっていることはえげつなくせに、妙な笑顔でカナが言った。対して、アルトは「無理を承知で言ってるでしょう……」といった感じで、気苦勞の絶えない神父のように顔に掌を当て、やれやれとしている。

こんなふたりだが、この場にいる誰もが感じたであろう――

――強い。

キンジはこのふたりを見て思い出したことがある。

「俺は組むべき相手を見つけたかもしれない」

キンジはまだ幼く、兄、金一が武偵校時代に言った言葉だ。

グループとして行動はしてきたが、相棒と呼べる存在を作らなかった――否、作れなかった金一がその言葉を発した時、キンジはかなり驚いた。

武偵でも他人と格の差があり過ぎるほど強いということを知っていたキンジは「兄と並ぶほどの実力を有した武偵が高校にいる」ということを一瞬で理解した。今思えばその「組むべき相手」というのは先ほどから台本通りようなコンビネーションをしているふたりの方割れ――神父服の青年だったのだらうと確信することが出来た。

「……………」

分離させたマチェットをくると手で弄びながら、鎌を振り回しながら、さく、さく、と砂金を踏んで迫るアルトとカナ。――

――パトラは、さらに退いた。

とうとう超能力に頼ることをやめ、人質を取ろうとしたのだろう。

思い出したように白雪の姿を探しているが、1剣1刀を抱えた白雪は、もうパトラから離れた玉座の裏に隠れていた。よそ見をしたパトラに対しーチッ！カナの大鎌が地面をこすり、僅かに飛んだ砂金が銃弾のように飛んだ。

ビシッ！――握りの砂金がパトラの金冠に当たって、正面を向かせる。

「あつっ！」

「よそ見はいけないわ、パトラ。今は、私だけを見なさい。まっすぐ、まっすぐに――」

催眠術にかけるように、曜くような口調で言うカナ。その間にアル

トはキンジに視線を投げかける。

今のうちに目的を遂行しろ

穏やかだが、強靱な意志をもった瞳を見たキンジは小さくうなずくと、足元に置いてあった拳銃を蹴り上げ、キャッチ。――
――ばっ！とパトラに背を向け、アリアの枢に飛び付いた。

十三の傷 歪みと歪み（後書き）

次で四巻は終わらせられるかな？

十四の傷 緋弾（前書き）

この回で終わると思ったら……終わりませんでした……。すいませ
ん。

十四の傷 緋弾

「後は貴方の行動次第ですよ。遠山キンジくん」

アリアと共に流砂によって流されたキンジを見て、アルトがつぶやく。

遠山キンジは神崎・H・アリアを絶対に助ける。証拠などなかったが、確信はできた。

「パトラ、もうやめて。あなたでは私とアルトに敵わないわ」

満身創痍のパトラにカナが言葉を投げかける。あくまで傷つけたくはないのだ。例えそれが敵対している相手でも、相手は女性なのだから――

だが、パトラはカナではなく、アルトをキツイ視線で、キツ！と睨む。憎悪がこもった瞳で忌々しそうに。

「……やはり、そうなのだな。ヘルシンググッ！貴様は妾を殺して、イ・ウーの王座に昇るつもりなのだなっ！」

錯乱したようにヒステリックな声でパトラが叫ぶ。

パトラが「教授」プロフェッショナルの席を狙っていたのはイ・ウーに所属していた人

間ならほとんど知っている事実だ。本気で錯乱し、狂ってしまったのか？理由は不明だが、パトラにとってアルトは自らの目的を奪い取る存在に思えるらしい。

「別にそんなつもりはありませんよ。大体、私がイ・ウーの頂点を狙う理由が――」
「嘘ぢゃっ！」

「嘘ぢゃ！とぼけるでない、何せ貴様は『王』の――」

ずずん……………

急に船体が揺れた。これが意味することそれは――

「沈んでしまえ……………貴様ら何ぞ沈んでしまえ……………！！」

パトラが何かしらの行動を起こしたのだろう。おそらくこのピラミッドを載せたアンベリール号の船底に積んであった爆薬が爆発したのだ。船体が大きく傾き、直立していることが困難になってくる。

「…………チィ…………パトラアッ!!」

珍しく苛立った声でアルトが叫ぶが、先ほどパトラがいた所には何もなかった。キンジとアリアの方へと向かったのだろう。一瞬で理解したアルトの心に焦りが生じる。

神崎・H・アリアは丸腰、遠山キンジの弾数は残りわずか。こんな状況下でパトラと争ったら、確実に負ける。アリアを奪われる!

「カナ、パトラの位置はッ!?!」

「流砂の中へ入っていったわ!でも、入口が塞がれてる」

「だったら……………勝手に開けさせてもらいます!」

ズガ、ガガガガガ!　ガガガガガッ!

二丁の大口径改造リボルバーによる計12連射。放たれた弾丸は黄金の壁を破壊し、大きな穴を開けた。

だが、空いた大きな穴は砂金が集まって、徐々にその穴を塞いでいる。パトラの魔力が及んでいるせいなのか！？

「カナツ、行きますよ！」

「ええ。でも、その前に――」

カナは部屋の隅で座り込んでいた白雪に近づくと、半ば強引に手を取り、真剣な顔で白雪を見つめる。

「キンジの力になりたいのでしょうか？なら来なさい」

コクン。小さく白雪は頷く。それを見たカナは優しげな笑みを浮かべて、アルトに目配せする。

（……了解）

アルト心の中で頷くと、穴へと走る。それにカナと白雪が続く。二人分はギリギリ入りそうにない穴だったので、突き破る形になったが、アルトとカナ、白雪は穴を通り抜け、ピラミッドの斜面を走った。

砂漠迷彩が施されたそれは、台場でアリアを撃った狙撃銃・WA2000。SF映画にでも出てきそうな近未来的シルエットの、高い精度で有名なオートマチック式狙撃銃だ。

それに増設されたレーザーサイトの照準が、つつつ……と、アリアの柔肌を……太ももから腰、腰から腹部、そして左胸へと、蛇が這うように上がっていく。

「つつ……！」

先ほどキンジに救出されたばかりのアリアは蛇に睨まれたカエルのように、動けなくなつた。

普段なら防弾制服に守られているその身体は、今、パトラに着せられた紐のような布の衣装しか纏っていない。ほとんど丸裸の状態なのだ。

（――なるほど。パトラ、お前は頭がいい。兄さんが認めるだけのことはある）

あれだけ魔力を自在に操りつつも、最後の最後は科学のカー銃。キンジたちの盲点を突くような武器に、切り替えた。その思考にキンジはこんな状況にもかかわらず、素直に感心した。

「結果的には後ろからでしくじったでの。今度は、前からぢゃ。その心臓、妾に捧げい」

にい、と笑ったパトラの一指を、キンジは睨む。

引き金が、引かれる……！

（銃弾撃ちで、反撃――いや、ダメだ。俺の銃は弾切れを起こしている）

手に持ったベレッタM92Fは既に撃ち尽くしてしまった。マガジンを替えればいい話だが、生憎とそんな時間をパトラが超越すはずもなく――パトラは引き金を引く、

「――！」

まさにその瞬間。キンジは飛びだした。

アリアの前方へ。

防弾ベストを着ている自身の身体を盾にするために――

そして、その瞬間、

敗北を悟った。

「さらばぢゃ、トオヤマキンジ」

WA2000のレーザーサイトはいつの間にか、キンジの頭に標準を合わせていた。

HSS——ヒステリアモードの事を知るパトラは予測していた。……キンジがアリアを自身の身体を盾としても守ることを。

「キンジっ!」

ダア

ン……………!

金切り声を上げるアリア。それを押し飛ばすようにして、キンジは後ろへとひっくり返った。

「キンジ！キンジ！」

頭部を撃たれた。そのような感覚はわかったが、どこを撃たれたかは分からなかった。

叫ぶアリアの声がひどく遠く感じながら、キンジは真後ろに倒れる。

「キンジ！ キンジ！ キンジい！」

（ごめんな。最後の……最後に、こんな顔、お前にみせることになつて……）

「キンジ……！ いやっ、いや……いやああああああああああああッ！」

キンジの死を悟り、アリアの悲鳴が反響する。

それは倒れているキンジにも聞こえていた。かなりぼやけているが、聞こえた。

キンジの顔を覆って庇うようにするアリア、両目をきつく閉じて顔をぶんぶんと振っている様も、歪んだ視界の中で見えた。

少なくとも即死ではなかった。だが、脳震盪を起こして口もきけず、身動きも取れない体はアリアの瞳には即死しているように見えた。

キンジ

！！！

アリアの絶叫が広間に響く。そして静寂が訪れた

「
!？」

「どうかしたの？」

斜面を疾走するアルトが何かに気がついた様子を隣を走るカナは見逃さなかった。

「……これは……泣き、声……？それと……何だ……？」

難しい表情で顎に手を当て、考えるような仕草をする。その様子に白雪は不思議な顔をする。もちろんカナと白雪には鳴き声のようなものは聞こえなかったが、カナはアルトの発言を否定するようなことはしなかった。

人狼の身体を持つアルトは犬と比べてもかなり優れた聴覚と嗅覚を有している。その耳が人間には聞こえない何かを感じ取っても不思議ではない。それを知っているから、何も言わなかった。

「……………?」

だから、カナは相棒^{アルト}の別の個所をいぶかしんだ。

——アルトの手が震えていた。

微かだが、確かに。その指が小刻みに揺れていた。まるで何かに恐怖するように、その指は揺れていた。

「……………これは……………まさか……………!？」

謎解きを終えた探偵のような表情で目を見開く。それは何かを確信した表情だった。

そして目の前にあるガラスを突き破ると、三人は目の前の光景に驚愕した。

青ざめた顔で、何も言わず、怯えたように後ずさるパトラ。

偶然でもなく、必然的に向いてしまった眼。パトラ、アルト、カナ、白雪の視線の先には何かがいた。

姿形はアリアそのもの。だが、明らかに纏っている気配が違いすぎる！アルトが恐れていたのはこれだったのだ。カナは一瞬で理解した。

目の中、瞳孔が、何かの動物のように緋色の光を放ち、右手を前に出すと

す。

人差し指で、パトラを指した。
それだけでパトラはまるで、猛獣に睨まれたようにすくみ上がる。
そして、すくみ上がった自分自身に驚いた顔をした。

「何じゃ、こ……この感情は？ ……こわい……？ わ、妾が……
お、恐れて……？」

パトラの手が、膝が、震えている。

ず、ずずず……！

パトラの恐怖心を表すように黄金床がせり上がって、その身を守る
巨大な盾に変化した。

「……………」

アリアの、拳銃のように突き出されたアリアの入差し指 - その先端
が――

―― 緋色に

―― 緋色に輝く。 緋色の光が、直径一メートル程まで
に広がっていく。まるで、小さな太陽のように。

「まさか……あれが……」

「……緋弾……！」

驚愕するアルトと後ずさる白雪の音が、広間に響く。アリアの指先に灯る緋色の光は、さらに広がり、その輝きを強めていく。

——あれは危険すぎる……

！！

——ぱあっ！

「避けなさいパトラ……！」

光がアリアの指先から飛び出した瞬間、カナは反射的に叫んでいた。その声で正気を取り戻したように、パトラは腰布を翻して黄金の床に尻をつき、浮かんでいる盾の下から、滑るようにして間一髪で光

を避けた。

緋色の光弾は――砲弾のように――

黄金の盾をまるで紙のように貫通し、先ほどパトラがいた場所を通
過して――

バシュウウウウウウウウウウウウウウウッ――

――！

星の爆発――超新星爆発のように、弾けた。

爆発や銃声とは全く異なる音。それと共に、その場にいた全員の世
界は緋色の光に塗りつぶされた――

十四の傷 緋弾（後書き）

どうでもいい話ですが、自分が作業用BGMとして使っている、やなぎなぎさん（ガゼルともnaggyともいいます）の曲を聞いてもらえたら嬉しいです。凄い透き通った声で、ニコ動にはファンが多い歌手さんです。最近は主に初音ミクのオリジナル曲を歌っています。暇なときでもいいので、ぜひ聞いてください。……長々とすいません。

十四の傷 伊・U

「青い…………青い…………ですね」

アリアの指先から放たれた閃光によって見事なまでに吹き飛ばされた天井から覗く、青い空を見上げ、アルトが言った。

潜入したのが夜の時間帯だったため、少しの時間が経てば『彼』が出てきても可笑しくはなかったはずなのだが……やはり「しばらく消える」という言葉は本当だったのだろうか。そのせいでイマイチ時間の感覚が掴めずにいた。

「う…………っ！」

そして、目の前には砂金の鎧を無くし無防備な姿を晒しているパトラ。いつも魔法人に頼っていたせいかわ、パトラは咄嗟に自分自身で魔法を使うことができなくなってしまったらしい。その頭に載せた金冠も、砂金となって落ちていく。

部屋の周囲に居並んでいた神々の像も次々に崩れ、砂へと戻る。ピラミッドそのものも崩れ、崩壊を始めていた。

「……………うおっ!？」

なんか来たア!?

急に滑ってこちらへ来た黄金櫃。

——反射、と言うべきだろうか?意識しないで、体は勝手に動き、突撃してくるそれを避ける際にアルトは黄金櫃の側面を思いっきり蹴っていた。

「——うあッ!」

アルトが蹴ったことによって、かなりのスピードで滑っていく黄金櫃は、見事。逃亡を図ろうとしていたパトラの背を掠めた。パトラは両脚を真上に上げて、黄金櫃の中にひっくり返って落ちる。その一連の動作、全て計算されたように正確なものだった。言うなれば人間「ピタゴラスイッチ」。パトラがビー玉である。

「……………おい、金一……（これはないだろう!?!）」

先ほどアルトが相棒^{カナ}をちらりと見ると
にやり。イヤな笑顔を浮かべてアルトを見ていた。

これは流石に酷いだろう。自分のことを好いている女性に対し、これは可愛そうだ。そう感じたアルトは普段の敬語が完全に消え、思わず相棒を「金一」と呼び捨て。

もちろん。HSSの金一——つまりカナは「金一」という言葉に反応しない。

そんなうちに白雪とキンジの共同作業によって、パトラは死人ではないが、枢に、まさしく霸王^{ファリスオ}の様に納められた。

「――お墓では静かにするものだよ、パトラ」

性格が悪い……。

妙に優しく言うカナに、頭を抱えたアルトは少々パトラに同情したくなった。……不本意とはいえ、パトラ収監の肩棒を担いでしまったのは事実なのだが……。

ピラミッドを出た一行はアンベリール号の舳先あたりへと集合して

いた。

先ほどまで寝ていたアリアも気がつき、キンジが抱きつこうとしたところ――アリアに白雪が抱きつき、阻まれていた。

「……全く、微笑ましい光景ですね。若いつていうのが羨ましいですよ………はあ」

「あら、あなただってまだ若いでしょう？いくらでも青春する機会はあるわよ」

「少なくとも貴方よりふたつも歳は上ですけどね……」

ほとんど年齢などを気にしない様なアルトであつたが今は、目の前の光景が羨ましかった。

――ひとりの男をめぐる女の争い。

――好きな女を守ろうとする男の勇氣。

どれも著書できそうなくらい、輝き、美しい物語だ。いつかはそんな物語の主演を務めてみたい。今のアルトはそんな気持ちで満たされていた。だが――

「……………」

いつまでもそんな惚気た気持ちを抱いているわけにはいかない。慈愛のような笑みが一転、険しい顔つきになる。その表情は最大の警笛を鳴らしていた。敵が、とてつもなく強大な敵が迫っている！ということを。

「——————キンジ……逃げなさいッ！」

敵の存在、強大さを感じたのは相棒^{カナ}も同じだった。まるで世界が終わったような表情でヒステリックのように自らの弟に「逃げる！」と必死に呼びかけている。だが、キンジは見たこともない、そんな様子のカナに驚愕しているだけで、なにも行動ができない。

「カナ、落ち着いてください！逃げる、といっても我々には手段はありません。気持ちはわかりますが、冷静になりましょう」

ここは海のと真ん中。逃げるも何も小舟すらない。アルトが混乱した相棒^{カナ}を諫めると、幾分かは落ち着いた様子になる。本当に幾分かだったか……。

——————ずず、ずずずずず……………地震など起こるはず

ために自ら動くということ。――計画は最終段階に入っているのだ。

ターンを終え、停止したボストーク号の艦橋に人影が現れる。アルトの瞳はその正体を完全に捉えていた。……そして狙っているライフルの銃口も……！

「――カナッ！」

ダメだいけない前に出るな！

キンジとアリアを守る盾のように前方へと立ち塞がったカナにアルトは叫んだ。一秒一秒がもの凄く長く感じられ、通常人間の三倍以上の速度で走ることができるアルトの脚もほとんど進んでいなかったようだった。

それはもしかしたら脳の処理速度が早くなったのか、他の現象かは不明だが――

「『^{プロフェッショナル}教授』……やめてください！　この子たちと戦わないで――」

――ビシュッ！　という音とまるで見えない何かに吹き飛ばされたカナをその瞳に焼き付けるとその時間は唐突に終わりを告げた。

長い三つ編みの中に泳がせ真後ろへと吹き飛んでいく相棒^{カナ}。確実に胸を撃ち抜かれていた。

ふざけるなああああああああああ
あああああああッッッ！！！！

アルトが叫び、懷から愛銃である漆黒の大口径リボルバーを取り出し、銃口をボストーク号の艦橋に居る人影へと向け、弾丸を放つ。

……だが、その一連の動作が行われることは無かった。

「……が、…あッ……！」

叫びの代わりに口から洩れたのは小さな悲鳴。そして胸に感じる焼けていくような痛み。銃を取り出すことすら許されず、撃つ代わりに撃たれた。

カナと同じ様に、方向へと吹き飛ばされたアルトに白雪が駆け寄る。彼女が発する気遣いの言葉は聞こえていたが、生憎と返す言葉が出なかった。その代わりにカナと自らを撃った男を思い切り睨みつける。

「ふむ……。まだ、僕を睨むほどの気力があるとはね。さすがだよアルトリウス。……いや、まだ君は”アルト”だったね」

意味のわからない事ばかり……！
アルトは近づいてくる男に心で悪態を吐いた。ひよる長い、やせた体に鷲鼻で角ばった顎。そして右手に持った古風なパイプと左手のステッキ。

これがこの男の正体を完全に明確とする。そう、武偵だけでなく世界の中に知れ渡っている伝説の存在にして、イ・ウーのリーダーである『教授』^{プロフェッショナル}という存在。その正体は……

「……曾、おじいさま………！？」

アリアが声にならない擦れ声で呼ぶ。間違いはない。むしろ大正解だ。他人の空似でもなく本人。二十歳ほどに見えるその青年こそ。

シャーロック・ホームズ1世という存

在なのだ。

十四の傷 伊・U（後書き）

……いつの間にか四ヶ月も経ってしまった……心待ちにしていた方がいらっしやるならすいません。構想はできていたのですが、どうも陳腐な文しかできなかったの……何回も試行錯誤の果てに時間を食いすぎてしまいました。

……結局陳腐な文で、申し訳ありません。

感想、評価、ご意見などお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2813s/>

緋弾のARIA～夜の怪物にして闇の狩人～

2011年10月30日15時11分発行